和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

－平成16年度（2004年度）－

2007

財団法人　和歌山市都市整備公社

序　文

本書は、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が平成16年度（2004年度）に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、国史跡の鳴神貝塚において貝層内から縄文時代晩期の土坑墓が３基見つかり、８体以上もの埋葬人骨が出土しました。埋葬方法の判明するものとしては、３体を合葬しているものもあり、この例は親子の墓である可能性が指摘されました。

井辺遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居を４棟検出し、初めて集落部を確認することができました。田屋遺跡では古墳時代の水田跡や水田に関連する用水路とみられる溝群を検出しました。和歌山城の調査では、内堀に架けられた「御橋廊下」二の丸側の据付部分及び二の丸西側部分の調査を行い、多聞櫓、土塀などや浅野期のものとみられる埋没していた石垣を確認するなど、それぞれの遺跡内容を明らかにすることができました。

以上、調査による新たな調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくてはならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

発掘調査にあたって御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年（2007年）３月９日

財団法人和歌山市都市整備公社

理事長　津　田　尚　吾

例　言

1．本書は、平成16年度（2004年度）に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載する。なお、本書作成に際して、財団法人和歌山市文化体育振興事業団から埋蔵文化財業務を引き継いだ財団法人和歌山市都市整備公社が原稿の作成を行ったものである。

2．本書に掲載の調査については、既に報告書が刊行されたものもある。未完のものについては報告書が刊行された際に、その報告をもって正式報告とする。

3．本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は北野隆亮が行った。

4．埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成を行った担当者は以下の通りである。

埋蔵文化財発掘調査

【平成16年度（2004年度）】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

総務課

学芸員　北野隆亮

学芸員　井馬好英

学芸員　奥村　薫

学芸員　髙橋方紀（～平成17年３月31日）

学芸員　藤藪勝則

学芸員　川口修実（～平成16年９月30日）

年報作成

【平成18年度（2006年度）】

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局　埋蔵文化財班

班　長　北野隆亮

学芸員　井馬好英

学芸員　奥村　薫

学芸員　藤藪勝則

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに

平成16年度（2004年度）の調査……1

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

1．田屋遺跡発掘調査……2

2．鳴神Ⅳ遺跡第10次調査・第11次確認調査……4

3．太田・黒田遺跡第54次調査……6

4．太田・黒田遺跡第55次調査……14

5．史跡和歌山城第29次調査……16

6．神前遺跡第４次確認調査……20

7．井辺遺跡第５次確認調査……22

8．木ノ本Ⅰ遺跡確認調査……24

9．直川地区埋蔵文化財試掘調査……26

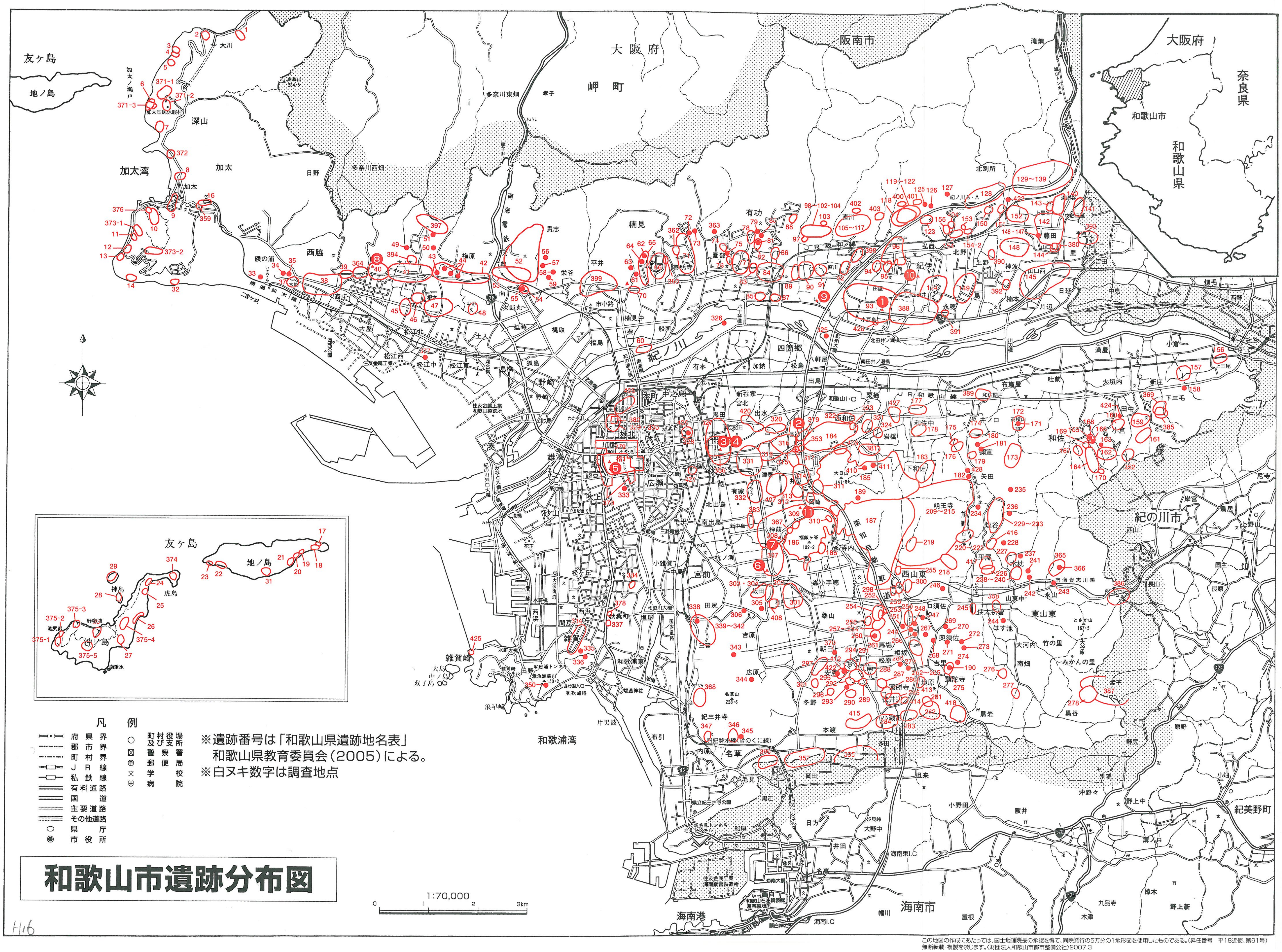
10．弘西地区埋蔵文化財試掘調査……28

11．井辺遺跡第６次調査……30

Ⅲ．遺物整理報告

1．秋月遺跡第９次調査遺物整理……32

Ⅳ．普及啓発活動……38



和歌山市遺跡分布図

この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を使用したものである。（承任番号　平18近使、第61号）
無断転載・複製を禁じます。(財団法人和歌山市都市整備公社) 2007.3

和歌山市遺跡地名表（「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会〈2005年〉より作成。）H16

遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称
1	報恩講寺遺跡	49	城山古墳	105~117	直川八幡山古墳群	174	禰宜Ⅰ遺跡	261	馬場遺跡	310	森小手穂埴輪窯跡	362	鳴滝遺跡	398	府中Ⅳ遺跡
2	大川西方遺跡	50	権現山1号墳	118	八王寺山古墳群	175	禰宜Ⅱ遺跡	262~265	東池古墳群	311	大日山Ⅰ遺跡	363	園部円山古墳	399	平井遺跡
3	藻江遺跡	51	権現山2号墳	119	橘谷Ⅰ遺跡	176	禰宜貝塚	266	吉里銅鐸出土地	312	井辺Ⅰ遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	400	深谷池北遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	52	高芝遺跡	120	橘谷Ⅱ遺跡	177	河南中学校北方遺跡	267	小山古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	365	永山遺跡	401	名草池北遺跡
5	水谷遺跡	53	高芝古墳群	121	橘谷Ⅲ遺跡	178	和佐中遺跡	268	奥須佐窯跡	314	鳴神Ⅱ遺跡	366	永山古墳	402	湯谷池西遺跡
6	男良の谷遺跡	54	栄谷貝塚	122	橘谷銅鐸出土地	179	和佐寺跡	269	円満寺古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	403	平野池南遺跡
7	深山遺跡	55	貴志古墳	123	弘西遺跡	180·181	禰宜古墳群	270	峯古墳	316	鳴神Ⅳ遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
8	大谷川遺跡	56	川原崎遺跡	124	北田井遺跡	182	和坂古墳	271	西光寺窯跡	317	鳴神貝塚	369	奥山田遺跡	405	山吹丁遺跡
9	加太遺跡	57~59	川原崎古墳群	125~127	別所古墳群	183	和佐古墳群	272	吉里1号窯跡	318	鳴神Ⅴ遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友田町遺跡
10	加太南遺跡	60	国有本遺跡	128	上野古墳群	184	花山古墳群	273	吉里2号窯跡	319	音浦遺跡	371	深山要塞跡	407	津秦Ⅱ遺跡
11	平の谷遺跡	61	大谷古墳	129~139	山口古墳群	185	岩橋千塚古墳群	274	頭陀寺古墳	320	鳴神Ⅵ遺跡	371-1	深山第1砲台跡	408	和田Ⅱ遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	62·64·65	晒山古墳群	140	山口廃寺跡	186	井辺前山古墳群	275	頭陀寺遺跡	321	岩橋遺跡	371-2	深山第2砲台跡	409	岩橋Ⅲ遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	63	慶円寺裏山古墳	141	中筋日延遺跡	187	寺内古墳群	276	大将軍窯跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	371-3	男良砲台跡	410	前山B226号墳
14	船出遺跡	66	雨が谷古墳群	142	山口遺跡	188	森小手穂遺跡	277	有ノ木窯跡	323	栗栖Ⅱ遺跡	372	加太砲台跡	411	前山B227号墳
16	加太駅北方遺跡	70	楠見遺跡	143	谷遺跡	189	寺内ナイフ形石器出土地	278	宝光寺跡	324	高橋神社遺跡	373-1·2	田倉崎砲台跡	412	城ノ前1号墳
17	藻崎北浜遺跡	71	鳴滝古墳群	144	里遺跡	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	279·280	松原古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	374	虎島砲台跡	413	境原遺跡
18	藻崎南浜遺跡	72	奥出古墳	145	川辺遺跡	209~215	山東古墳群	281	滝ヶ峯古墳群	326	有本銅鐸出土地	375	友ヶ島要塞跡	414	薬勝寺Ⅱ遺跡
19	藻崎西浜遺跡	73	有功経塚	146	藤田古墳	218	若林古墳群	282	滝ヶ峯遺跡	327	太田・黒田遺跡	375-1	友ヶ島第1砲台跡	415	本渡遺跡
20	神前東浜遺跡	74	園部Ⅰ遺跡	147	硲古墳	219	吉礼砂羅谷窯跡	283	薬勝寺南山古墳群	328	吉田窯跡	375-2	友ヶ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
21	神前西浜遺跡	75	園部古墳	148	藤田遺跡	220~222	平尾古墳群	284	仁井辺遺跡	329	鷺ノ森遺跡	375-3	友ヶ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
22	屋敷浜遺跡	76	園部Ⅱ遺跡	149	宇田森遺跡	226	楠古墳群	285	薬勝寺跡	330	鷺ノ森窯跡	375-4	友ヶ島第4砲台跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	77	有功遺跡	150	上野廃寺跡(紀伊薬師寺跡)	227	足守神社古墳群	286	薬勝寺遺跡	331	秋月遺跡	375-5	友ヶ島第5砲台跡	420	太田城水攻め堤跡
24	一色谷遺跡	78	池田遺跡	151	上野遺跡	228	赤山古墳	287	松原Ⅰ遺跡	332	津秦遺跡	376	行者堂東遺跡	421	木広町遺跡
25	柏の浜遺跡	79	有功古墳	152	上黒谷遺跡	229~233	塩谷古墳群	288	松原Ⅱ遺跡	333	岡の里古墳	377	松江経塚	422	朝日蔵骨器出土地
26	深蛇池遺跡	80	大同寺墳墓	153	北野窯跡	234	新出古墳	289	薬師谷遺跡	334	関戸遺跡	378	猩口石岩陰遺跡	423	上黒谷Ⅱ遺跡
27	垂水遺跡	81	大同寺古墳	154	北野遺跡	235	明王寺経塚	290	江南遺跡	335	関戸古墳	379	和歌山城跡	424	東田中遺跡
28	神島遺跡	82	大同寺遺跡	154-2	北野Ⅱ遺跡	236	矢田古墳	291	曽垣田遺跡	336	天神山古墳	380	山口御殿跡	425	雑賀崎台場跡
29	沖の島北方海底遺跡	83	法然寺遺跡	155	若宮池遺跡	237	北池古墳	292	曽垣田Ⅱ遺跡	337	秋葉山貝塚	381	岩橋Ⅱ遺跡	426	小豆島西遺跡
30	野奈浦遺跡	84	六十谷遺跡	156	上三毛遺跡	238~240	殿山古墳群	293	曽垣田古墳	338	アンドの鼻古墳	382	本願寺跡	427	岩橋高柳遺跡
31	ハイブの浦遺跡	85	和田遺跡	157	下三毛遺跡	241	土井山古墳	294	城の前Ⅱ遺跡	339~342	三田古墳群	383	神前Ⅱ遺跡	428	和坂南垣内古墳群
32	浜遺跡	86	西辻遺跡	158	小山古墳	242	丸山古墳	295	城の前Ⅰ遺跡	343	吉原古墳	384	高松焼窯跡	指1	史跡和歌山城
33~35	磯の浦古墳群	87	川口遺跡	159	寺山古墳群	243	高岡古墳	296	大池遺跡	344	広原古墳	385	奥山田古墳群		
37	磯脇遺跡	88	六十谷古墳群	160	東国山古墳群	244	桜山古墳	297	赤津古墳群	345	内原古墳	386	大池遺跡		
38	西庄遺跡	89	直川遺跡	161	宮山古墳群	245	伊太祈曽神社古墳群	298	吉礼貝塚	346	内原遺跡	387	大旗山城跡		
39	平の下遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	162·163	小倉古墳群	246	チショ古墳	299	西吉礼遺跡	347	名草貝塚	388	西田井遺跡		
40	木ノ本Ⅰ遺跡	91	高井遺跡	164	明楽古墳群	247~249	城ヶ森古墳群	300	東吉礼遺跡	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡		
41	木ノ本Ⅱ遺跡	92	鳥井遺跡	165·166	小倉神社古墳群	250	城ヶ森遺跡	301	和田遺跡	352	金谷廃寺跡	390	神波遺跡		
42	木ノ本Ⅲ遺跡	93	田屋遺跡	167	モント古墳群	251	相坂古墳	302	和田岩坪遺跡	353	興徳寺跡	391	永穂遺跡		
43	木ノ本経塚	94	府中Ⅱ遺跡	168	小倉神社境内遺跡	252·253	千石山古墳群	303·304	和田古墳群	356	太田城跡	392	楠本遺跡		
44	釜山古墳群	95	府中Ⅲ遺跡	169	金谷遺跡	254	菖蒲谷遺跡	305	竈山神社古墳	357	山崎山古墳群	393	吉田遺跡		
45	木本小学校Ⅰ遺跡	96	府中遺跡	170	奥池遺跡	255	吉礼Ⅲ遺跡	306	坂田地蔵山古墳	358	山東中遺跡	394	城山遺跡		
46	木本小学校Ⅱ遺跡	97	北山Ⅰ遺跡	171	高積山遺跡	256	千石山遺跡	307	神前遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	395	岡村遺跡		
47	榎原遺跡	98~102·104	北山古墳群	172	薬徳寺跡	257~259	井戸古墳群	308	井辺遺跡	360	雨が谷遺跡	396	室山古墳群		
48	中野遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	173	城ヶ峯城跡	260	馬場古墳群	309	岡崎縄文遺跡	361	冬野遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡		

Ⅰ．はじめに

平成16年度（2004年度）の調査

和歌山市における平成16年度（2004年度）の財団法人和歌山市文化体育振興事業団（平成18年３月末日解散）の発掘調査受託事業は12件である。

調査に至った原因としては、店舗建設などの民間受託が５件に対して遺跡範囲確認調査などの公共的な調査が７件を数え、前年度に比べると民間受託が増加し、公共関係の調査は確認調査が主体を占めた。公共関係の調査では和歌山城御橋廊下などの史跡整備関連調査のほか、国の史跡である鳴神貝塚の確認調査などが行われた。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

縄文時代　近畿地方で最初に発見された鳴神貝塚において、貝層内の土坑から縄文時代晩期の重なり合う３基の土坑墓を検出し、８体以上もの埋葬人骨が出土した。埋葬方法の判明するものは仰臥屈葬で、なかには親子の可能性がある３体が合葬されたものもみられた。

弥生時代　太田･黒田遺跡第54次調査において方形周溝墓の可能性のある「L」字状の溝や土坑などを検出した。また同遺跡第55次調査では前期の溝や前期から中期にかけての柱穴などを検出している。

古墳時代　太田･黒田遺跡第54次調査で古墳時代初頭の井戸を検出し、祭祀に伴うとみられる完形の土器群が出土している。また、井辺遺跡では古墳時代の集落縁辺部の様相を確認した。田屋遺跡では古墳時代の水田区画・灌漑用水路を検出した。

奈良～平安時代　直川地区の調査において、奈良時代の溝を１条、平安時代の溝・土坑を検出し、本調査地北東部を中心とした当該期の遺跡の存在を確認した。

江戸時代　史跡和歌山城第29次調査で、内堀に架けられた「御橋廊下」二の丸側の据付部分及び二の丸西側部分の調査を行い、多聞櫓、土塀などや浅野期とみられる埋没石垣などを検出した。

【2004年度調査一覧表】

番号	調　査　名	原　　因	調査期間	面積(㎡)	調　査　概　要	担当者名
1	田屋遺跡	店舗建設	４～６月	368	古墳時代の水田跡、灌漑用水路を検出。	井馬・藤藪
2	鳴神Ⅳ遺跡第10次 鳴神Ⅳ遺跡第11次	店舗建設 範囲確認	５月	54	鳴神貝塚の縁辺部にあたり、３基の土坑墓から縄文時代の埋葬人骨８体以上が出土。	川口
3	太田･黒田遺跡第54次	集合住宅建設	５～６月	49	弥生時代前期の方形周溝墓の可能性のある「L」字状の溝を検出。溝内部から前期の遺物が一括して出土。	奥村
4	太田･黒田遺跡第55次	立体駐車場建設	７～８月	39	弥生時代前期の溝、前期から中期の土坑・柱穴を検出。8世紀代の須恵器杯身を転用した硯が出土。	藤藪
5	史跡和歌山城第29次	史跡整備	８～１月	740	「御橋廊下」二の丸側据付部と二の丸西側部分を調査。浅野期と考えられる砂岩の埋没石垣を検出。	髙橋
6	神前遺跡第４次	範囲確認	12月	50	古墳時代の遺物包含層を確認。	井馬
7	井辺遺跡第５次	範囲確認	１月	140	古墳時代と鎌倉時代の遺構を検出。	北野
8	木ノ本Ⅰ遺跡	範囲確認	１月	60	中世の農耕に伴うとみられる小溝群を検出。	井馬
9	直川地区	試掘調査	２月	1,841	奈良時代から平安時代の遺構を確認。	北野･井馬･藤藪
10	弘西地区	試掘調査	２月	160	平安時代から鎌倉時代にかけての遺物包含層を確認。	益田(市教委)
11	井辺遺跡第６次	宅地造成	３月	140	弥生時代後期から古墳時代前期の集落を初めて検出し、遺跡の中心部の様相が明らかとなった。	北野

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

１．田屋遺跡発掘調査

調 査 地　　和歌山市小豆島53－１番地・和歌山市田屋137番地他

調査面積　　368㎡

位置と環境

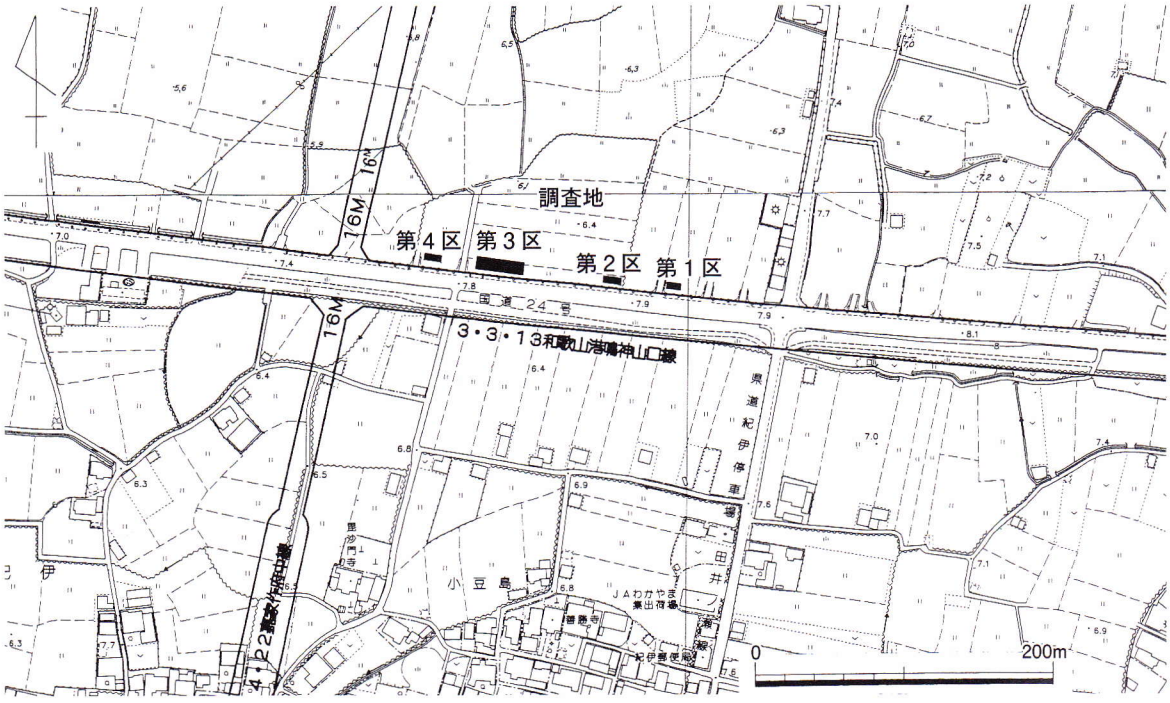
田屋遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡として周知されている遺跡で、東西1km、南北750mを範囲としており、遺跡の東端は弥生時代から室町時代の集落跡である西田井遺跡と接している。田屋遺跡では、これまで和歌山県教育委員会が実施した一般国道24号バイパス関連の調査及び、社団法人和歌山県文化財センターが実施した県道紀伊停車場田井ノ瀬線関連の調査において、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居50棟のほか、同時期の掘立柱建物や溝、旧河道、平安時代の掘立柱建物など多くの遺構を検出し、弥生土器、土師器、須恵器をはじめとする多量の遺物が出土している。

今回の調査地は、田屋遺跡範囲の東端部に位置する。

調査内容

調査区は、工事計画範囲のうち深掘される部分を対象に設定した。調査地は一般国道24号線北側の水田地帯にあたり、この道路に沿った４地点が調査対象地区にあたる。

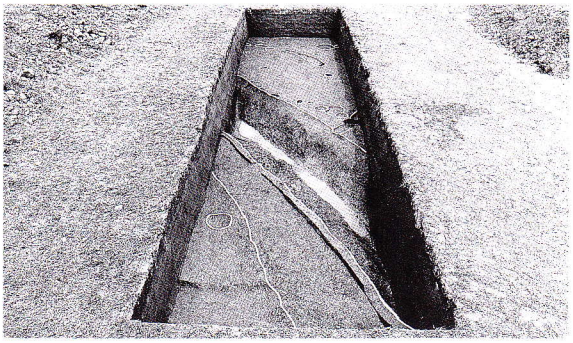
調査地の基本層序は、各調査区とも相対的に類似する様相である。まず表土（第１層）は厚さ15～17cmを測る水田耕土である。表土下には、その床土と考えられる第２層が５cm前後の厚みでみられる。第３層は、江戸時代の水田耕土と考えられるもので、厚さ12cm程度で１～３単位に細分できる。第４～６層は、厚さ10～15cmを測る黄褐色系の土層で、室町時代までの堆積と考えられる。第



調査位置図

７層は、厚さ20cmを測る黄灰色系の粘土で鎌倉時代の遺物を含む。第４区では、この第７層上面において鎌倉時代以降とみられる溝等を検出した。第８層は、古墳時代の遺物を比較的多く含む土層であり、第９層は、褐色粒を斑状に含む黄褐色系のシルトで、微量の縄文土器と石器が出土した。この第９層上面では、各調査区において古墳時代の遺構を検出した。第10・11層は、各調査区において確認した厚さ20～30cmを測る粘土質層である。また第12～15層は、第３区等で深掘調査区を設定し確認したもので、これら各層から遺物は出土しなかった。

第３区　全景（西から）



第４区　第２遺構面全景（西から）

遺構は、第１・２区の古墳時代の遺構面に相当する第９層上面（標高は、5.50m前後）において、水田畦畔とみられる高まりのほか、径５～20cmを測るピットなどを検出した。また第３区では、同じく第９層上面（標高は、北西隅部で標高5.68m、南東隅分で標高5.56m）において、古墳時代の不定形な水田状の落ち込みを２ヶ所、溝８条のほか、径10cm程度の杭状のピット及び不定形なピットを検出した。これらの遺構群は、重複関係や方向性から少なくとも４時期にわたって形成されたものと考えられる。次に第４区では、第７層上面（標高約5.80m）と第９層上面（標高約5.70m）の２面において遺構を検出した。第９層上面では、古墳時代の重なり合う３条の溝とその東側に弧を描くように検出した溝状遺構のほか、径20～40cmのピットなどを多数検出した。第７層上面では鎌倉時代以降室町時代にかけての溝２条及び土坑１基を検出した。

まとめ

調査の結果、調査地の東端部に位置する第１区と第２区は、調査区全体を通してみた場合、古墳時代に相当する遺構面の標高が低いことから微低地部にあたるものとみられ、第３区は遺構面の状況からみて微高地部から微低地部への緩やかな傾斜部にあたる地点と判断できた。また第４区は、第３区北西端部に比べ標高がやや低い地点にあたるものの、古墳時代の遺構が密集する状態で検出できた調査区である。今回の調査において検出した遺構の中で重要視すべきものには、第１～３区において検出した古墳時代の水田区画に関係する畦畔状遺構や、第３・４区において検出した灌漑に関係するとみられる溝群がある。これらの遺構群の検出状況から、田屋遺跡における古墳時代の水田稲作は調査地の東側一帯を中心として営まれていたものと考えられる。

また水田に引水する水源は、遺構検出面である第９層上面の標高から調査地の西側に位置するものとみられ、第４区の南西約80mに位置する財団法人和歌山県文化財センターの調査では自然流路が検出されている。よって、田屋遺跡の水田は第４区検出の用水路と考えられる溝群の方向性から判断して、この自然流路から引水したものと考えられよう。　（藤藪勝則）

2．鳴神Ⅳ遺跡 第10次調査・第11次確認調査

調 査 地　　和歌山市鳴神568－1番地

調査面積　　54㎡

位置と環境

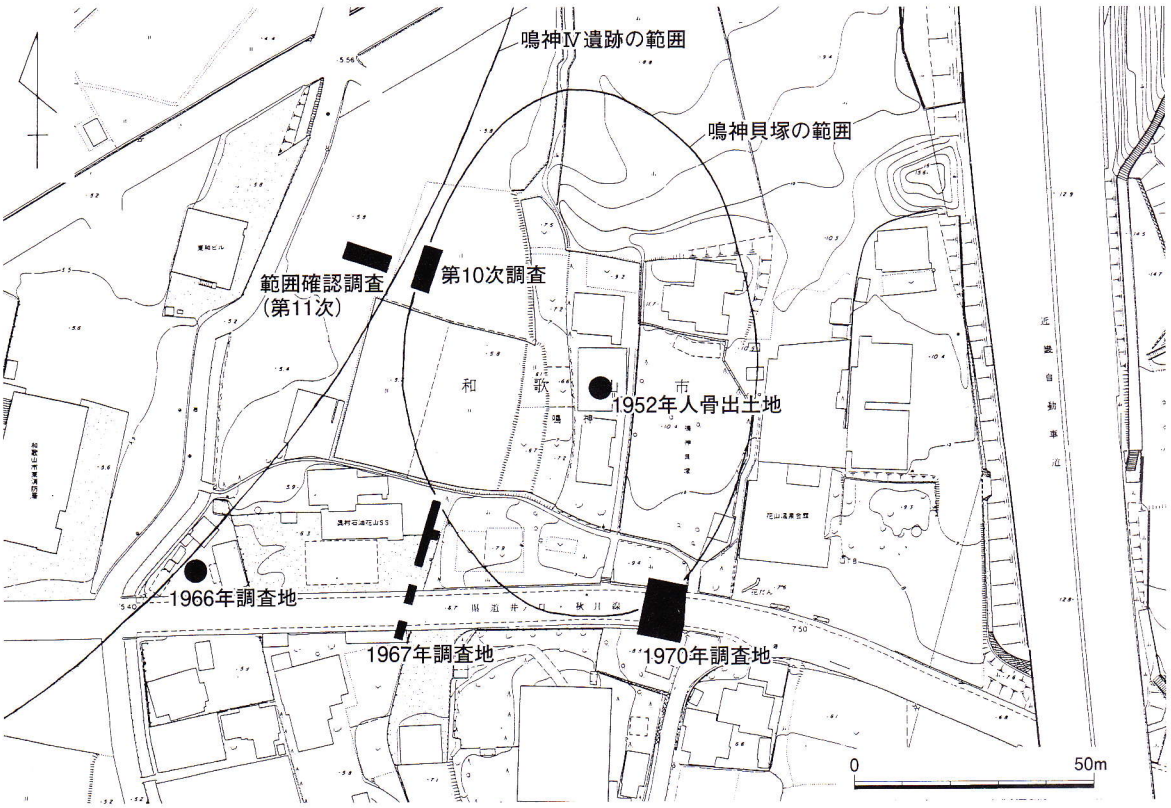
鳴神Ⅳ遺跡は紀ノ川の南岸、岩橋千塚古墳群の一支群である花山古墳群の西側に位置する遺跡である。第10次調査は、和歌山市教育委員会による事前の試掘調査の結果、鳴神貝塚の縁辺部に相当する貝層が確認されたことを契機として行われた調査で、第11次調査はその貝層の広がりを確認するために行った調査である。

調査内容

調査地は標高約6.0m程度の駐車場等であり、貝層が検出された土層までの深さは1.8～2.2mを測り、貝層の上部には20～40cmの厚みである縄文時代晩期の遺物包含層が堆積していた。第10次調査ではこの包含層を切り込む同時期の土坑墓３基が検出された。貝層の堆積は北側から南側へ、東側から西側へ傾斜をもって堆積し、第10次調査の西端を境として堆積が急に厚くなり、さらに西側は谷状の地形をなしているものと考えられた。

第10次調査で検出した３基の土坑墓からは、部分的に遺存しているものも含め、８体以上の埋葬人骨が出土し、その内の１基からは成人男性１体、成人女性１体、小児１体の３体が合葬した状態で検出された。

第11次調査では遺構は確認していない。貝層の堆積時期については、上位の縄文時代晩期の土器



調査位置図

を含む堆積と下位の縄文時代早期末から前期初頭にかけての土器を含む堆積の２時期に分けられる。

貝層の状況は、第10次調査では貝種としてハマグリが主体で、ハイガイ・カキを少量、シジミを微量含む。貝は全体的に保存状態が不良なものが多く破砕貝が多い。また第11次調査ではハマグリが主体で、ハイガイがそれに次ぐ出土量である。しかし、下位層にはカキの占める比率が高く、上位層に比べシジミの占める比率が高い傾向が指摘でき、下位層ほど保存状態が良く完形に近い状態のものが多く含まれていた。

第10次調査　土坑墓２検出状況

第11次調査　南壁面貝層堆積状況

遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、肥前系陶磁器、近世陶器、瓦、石器、自然遺物などがある。縄文土器は、表裏条痕をもつ早期末から前期初頭にかけてのものや縁帯文をもつ後期のものが少量出土しているものの、大半は晩期の深鉢・浅鉢である。打製石器は、サヌカイトの石鏃やスクレイパーの他、剥片が多量に出土した。磨製石器は小型の石斧が１点あり、また礫石器は、砂岩・片岩の礫を用いた叩石・磨石・台石・石錘などがある。石製品では、滑石製の臼玉２点が出土している。自然遺物については埋葬人骨の他、動物遺体として獣骨や魚骨、貝殻が出土している。

まとめ

今回の調査地は鳴神Ⅳ遺跡と鳴神貝塚の境界部にあたり、特に調査の主体となった鳴神貝塚における北西縁辺部の状況を確認することができた。特に、第10次調査では埋葬人骨を８体以上確認し、当調査地が墓域にあたることが判明した。この墓域は居住空間とみられる丘陵頂部と西側へのびる緩斜面から谷状地形に至る地形の変換点に展開していたものと考えられる。

鳴神貝塚における貝層の分布範囲として、遺跡中央部では縄文時代前・中期に形成時期が求められ、周辺部ではその大半が縄文時代晩期にその形成がみられる。既往の調査成果からみて、その範囲は東西約140m、南北約120m程度と推定することができよう。　（井馬好英）

【参考文献】　『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成16年度－　財団法人和歌山市教育委員会　2006年

3．太田・黒田遺跡第54次調査

調 査 地　和歌山市太田字城跡479－6番地

調査面積　49㎡

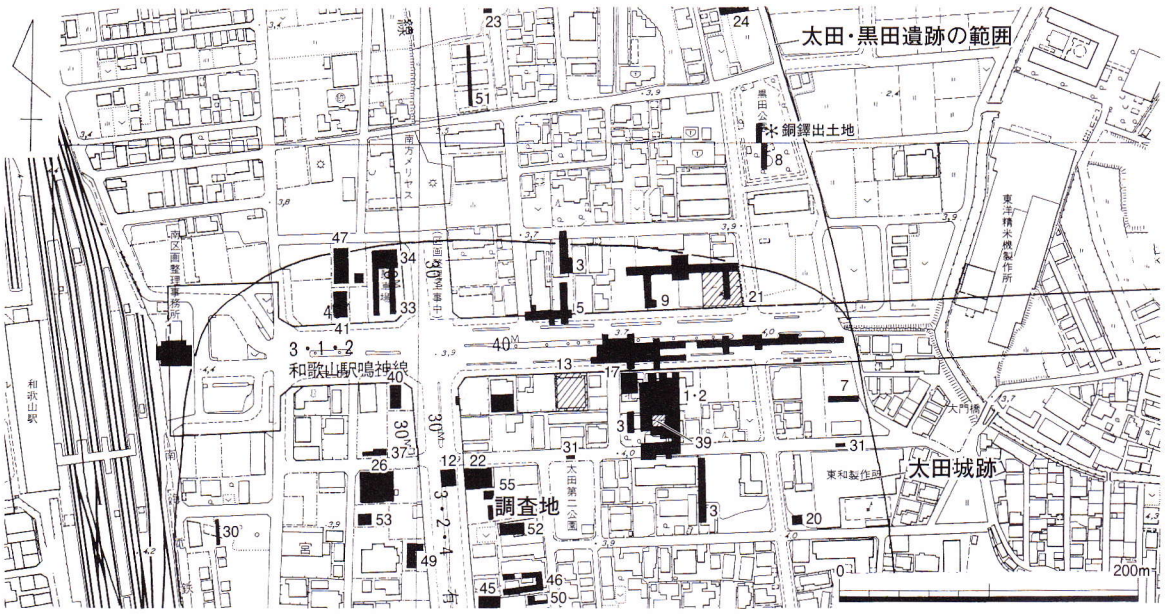
位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置する。本遺跡は弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模の集落跡として知られ、弥生時代前期の集落域やこれらの周囲をめぐるとみられる環濠２条、弥生時代中期の竪穴住居・井戸などの集落域や弥生時代中期の水田などの生産域に関わる遺構、土坑墓・土器棺墓などの埋葬施設が確認されている。また、絵画土器（鹿など）を含む多量の弥生土器などの他、直柄広鍬や鋤などの木器、銅鐸や銅鏡などの重要な遺物が出土している。古墳時代では前期の竪穴住居や溝などが確認されている。

今回の調査対象地は、遺跡のほぼ中心部に位置し、標高は約3.6ｍを測る。

調査内容

調査は、集合住宅建設予定地に東西幅４ｍ、南北長12.3ｍの調査区を設け、実施した。現地表下の土層堆積状況は、近・現代の整地土が厚さ約70cm、第１層（旧耕土）が約20cm、第２層（旧床土）が約２cm、第３・４層は10～20cmの厚さで堆積する。第５層は調査区東壁面では確認できなかったが、10～20cmの厚さで東端以外のほぼ全体に堆積する。第６層は10～40cm、第７層は10～25cmの堆積である。第８層下の状況は、調査区の東壁面に沿って設定した下層調査のための深掘トレンチにおいて第11層までの堆積を確認した。第８層は10～20cm、第９層は約20cm、第10層は約40cm、第11層は40cm以上の堆積である。包含する遺物より第３層から第６層は弥生時代中期、第７・８層は弥生時代前期のものと考えられる。第９層以下については、遺物を確認していないことから無遺物層であると考えられる。第１層から第６層の堆積はほぼ水平堆積、第７層から第９層はやや西側に傾斜をもつ堆積である。また第６層から第９層は炭を含む堆積層である。



調査位置図

検出した遺構の概要は、第３層から第８層の各層上面において合計６面（第１遺構面から第６遺構面）の遺構面を確認することができた。

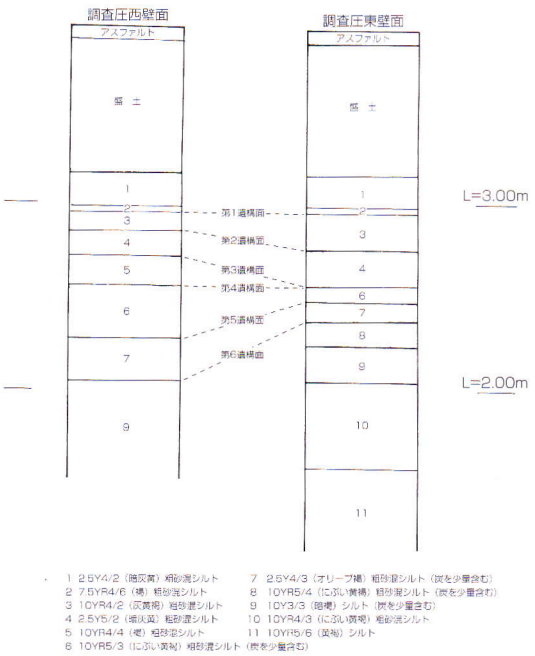
以下、主要な遺構について古い時代からの記述を行う。

〔第６遺構面〕　第８層上面において検出したもので遺構面の標高は2.3m前後である。

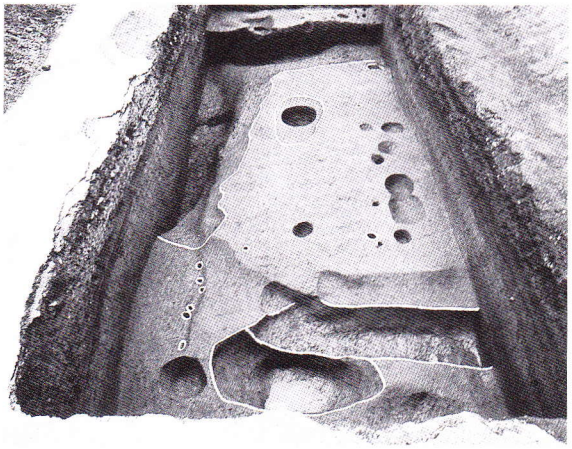
溝15は東西に掘削された溝である。幅約60cm、深さ約40cmで、長さ2.8m以上を検出した。埋土は３層に分層でき、各層には炭が大量に含まれる。

溝16はL字状を呈し、南北長約4.5m、東西長2.4m以上、幅1.5m以上、最深約1.2mである。埋土は３層に分層でき、各層の底面には２～６cmの厚さで炭が堆積している。この溝の底面において３カ所の落込みを確認した。この覆土は溝の第３層に相当し、下位からは大量の弥生土器のほか、石器、木器、骨角器の他、種子・炭などの自然遺物が出土している。

土坑24・25は落込み状遺構６を掘削後に検出した。土坑24は長径約1.1m、短径約60cm、残存する深さ約15cmの覆土には大量の炭を含むものである。土坑25は長径1.9m、短径約70cm、深さ約76cmである。覆土からは弥生土器や骨角器などが出土している。



土層柱状模式図



第６遺構面　全景（南から）

土坑26は長径1.6m、短径80cm、深さ約2.2mである。覆土からは、粘板岩製石包丁などが出土している。

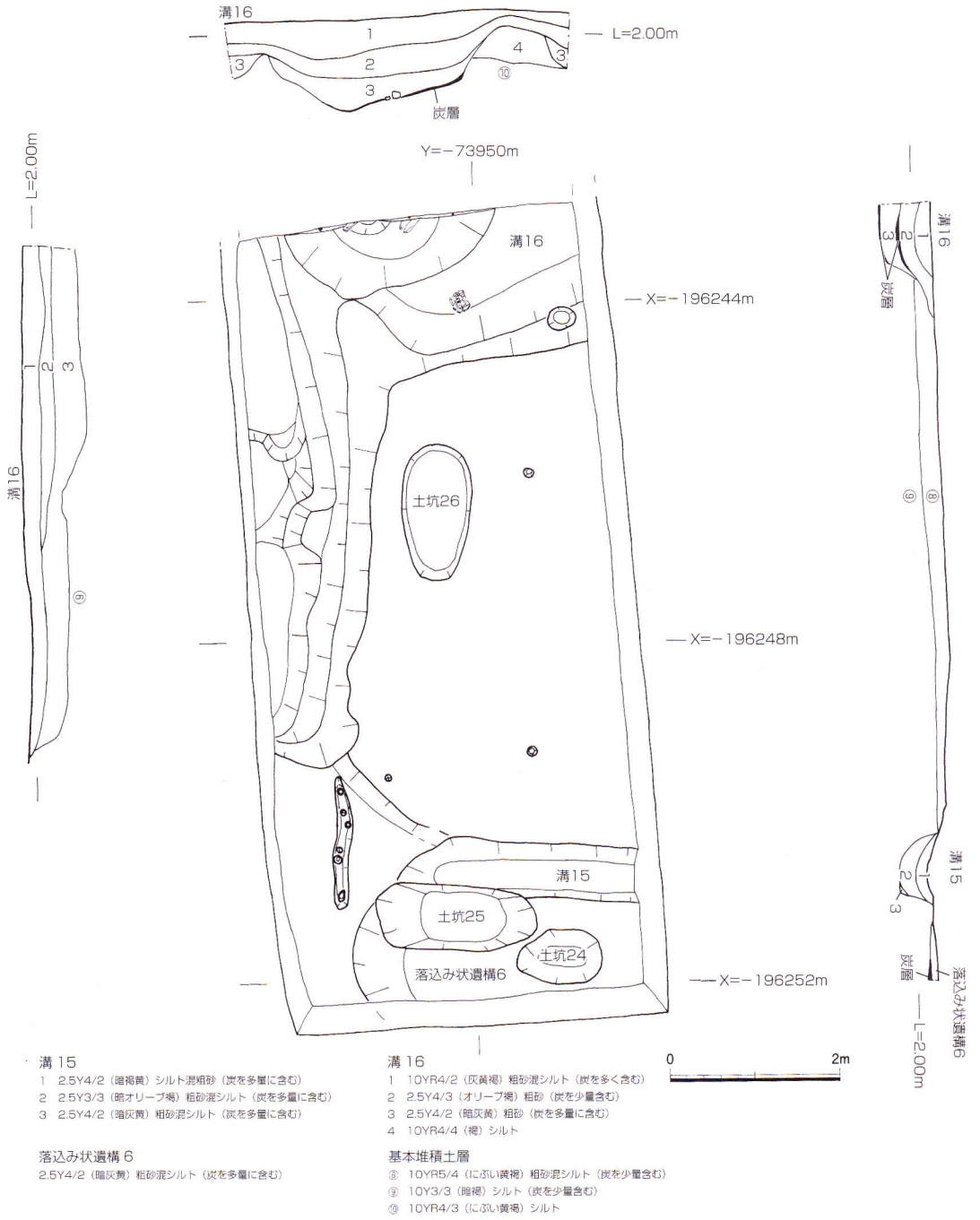
落込み状遺構６は、幅70cm以上、長さ3.4cm、深さ約12cmである。遺構の底面には、炭が２～５cmの厚さで南側へ傾斜をもって堆積していた。

以上のほか、直径５～10cmの杭穴９基、直径30cmのピットを１基検出した。

これらの遺構の時期については、出土遺物から弥生時代前期後半のものと考えられる。

〔第５遺構面〕　第７層上面において検出したもので遺構面の標高は2.4m前後である。南側で検出した落込み状遺構５は南北３m以上、東西4.2m以上、深さ約20cmであるが、調査区外へと広がるもので性格は不明である。

このほかに、ピットを13基検出した。規模は直径10～15cm前後のものを５基、直径20cmのものを３基、直径30～60cmのものを５基検出した。このうちピット159は、直径約60cm、検出面からの深さは約20cmであり、遺物の出土状況から土器棺墓の可能性が考えられる。



第６遺構面　遺構平面図・土層断面図

これらの遺構の時期については、出土遺物から弥生時代中期初頭のものと考えられる。

〔第４遺構面〕　第６層上面において検出したもので遺構面の標高は2.6m前後である。南西隅の落込み状遺構４は、南北長2.4m以上、東西長1.5m以上、深さ約20cmである。

土坑23は直径90cm、深さ約10cmである。遺物は頸部に押圧文が施された壺やクシ描直線文が施された壺などが出土している。このほか直径５～10cmのピットを７基、直径20～40cmのピットを４基検出した。埋土からは、ヘラ描直線文を施した壺、クシ描直線文や波状文が施された紀伊第Ⅱ～第Ⅲ様式併行期とみられる壺など、弥生時代中期中頃のものが出土している。

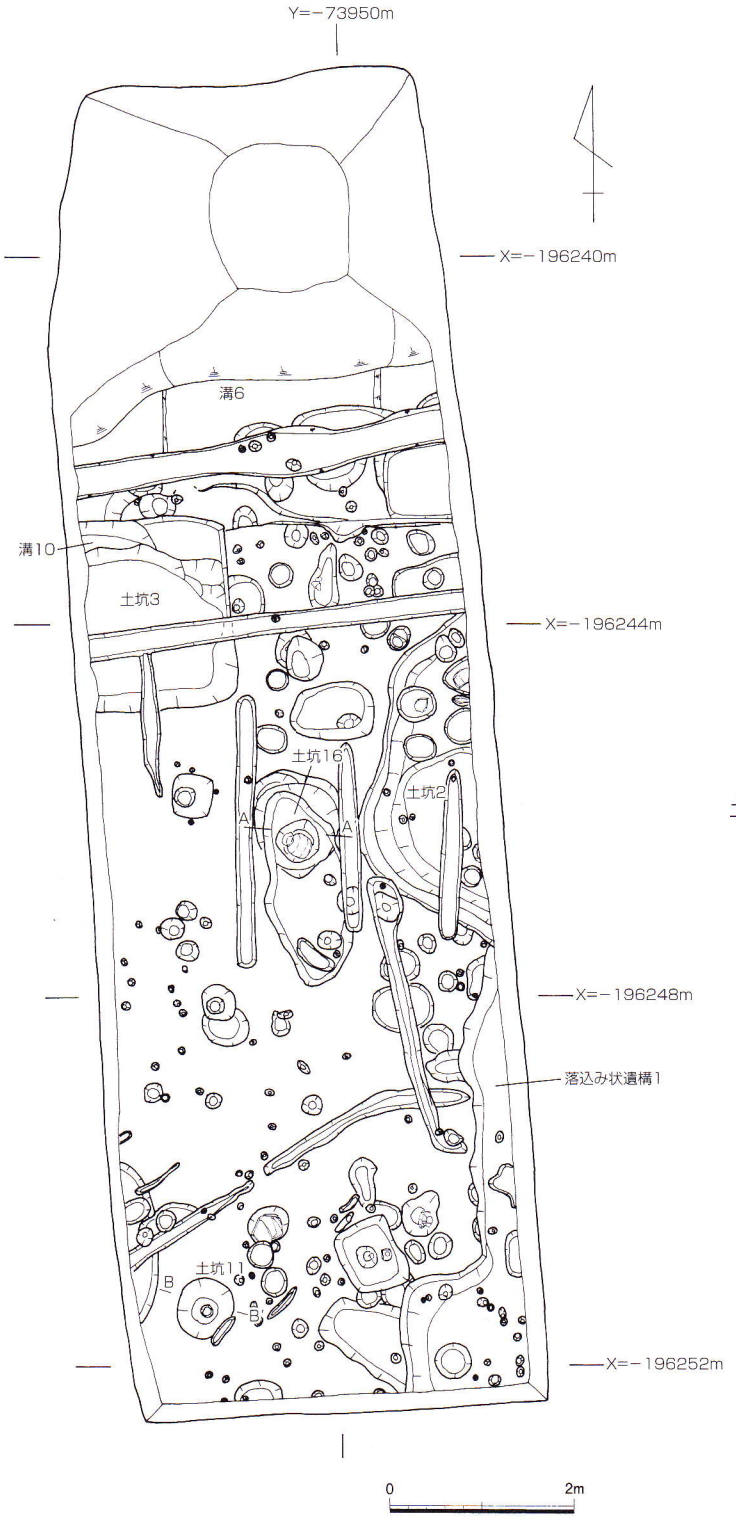
〔第３遺構面〕　第５層上面において検出したもので遺構面の標高は2.7m前後である。北側の溝14は東西方向に掘削され、幅約90cm、深さ約20cm、東西長2.3m以上である。この下面において検出

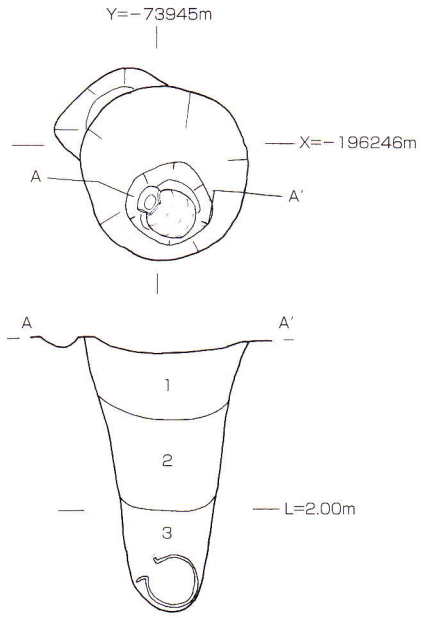
した土坑22は60×90cm、深さ約20cmである。西側は土坑３によって壊されている。

このほか南東隅で直径50×60cm以上の被熱を受け赤変した面を検出した。また、直径約10cmのピットを２基、直径20～40cmのピットを４基検出した。

これらの遺構は、出土遺物から弥生時代中期中頃のものと考えられる。

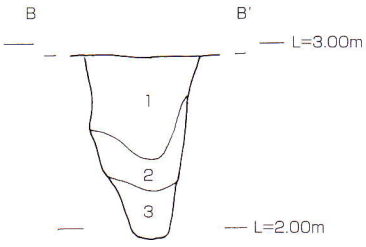
〔第２遺構面〕 第４層上面において検出したもので遺構面の標高は2.8m前後である。遺構の大半





1 10YR3/2（黒褐）粗砂混シルト
2 10YR2/3（黒褐）シルト
3 10YR2/1（黒）シルト

土坑16　遺構平面図・土層断面図



1 2.5Y3/1（黒褐）粗砂混シルト
2 2.5Y3/3（暗オリーブ褐）シルト混細砂
（2.5Y5/6（黄褐）シルトのブロックを含む）
3 2.5Y4/4（オリーブ褐）シルト混粘土

土坑11　土層断面図

第１遺構面　遺構平面図・土層断面図

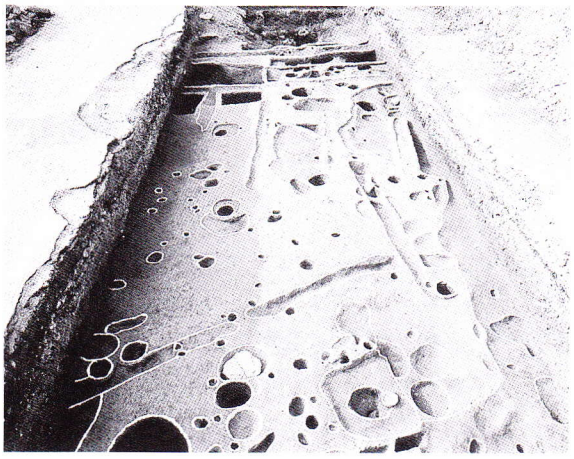
は、直径５～10cmのピットで、これらの中には斜め方向のものもあり、杭穴とみられる。このほか、直径30～40cmのピットや溝などを検出した。

これらの遺構は、出土遺物から弥生時代中期後半のものと考えられる。

〔第１遺構面〕　第３層上面において検出したもので遺構面の標高は2.9m前後である。

弥生時代の遺構は、ピットや土坑などを検出した。ピットは直径５～10cmと直径30～40cmの２群に分けられ、前者は杭穴と考えられる。

古墳時代の遺構について、土坑16は直径90cm、深さ1.5mを測る井戸である。埋土は３層に分層でき、底面において布留式併行期のものとみられる完形の広口壺や小型丸底壺、高杯などが出土した。土坑11は古墳時代後期の井戸と考えられるもので、直径約60cm、深さ約１mである。埋土は３層に分かれる。これらのほか、土坑やピットを多数検出した。



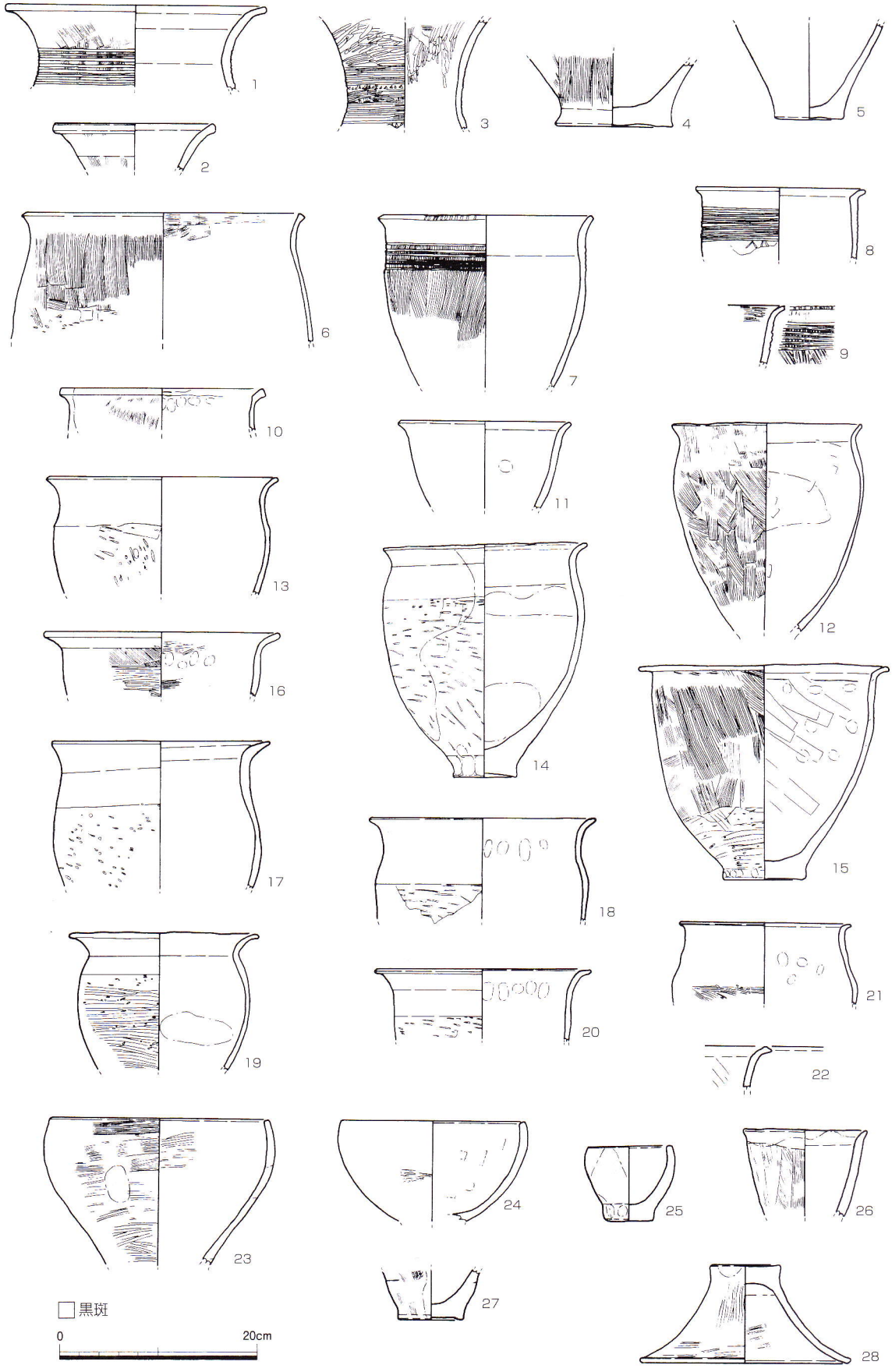
第１遺構面　全景（南から）

中世の遺構は溝10、落込み状遺構１を検出した。

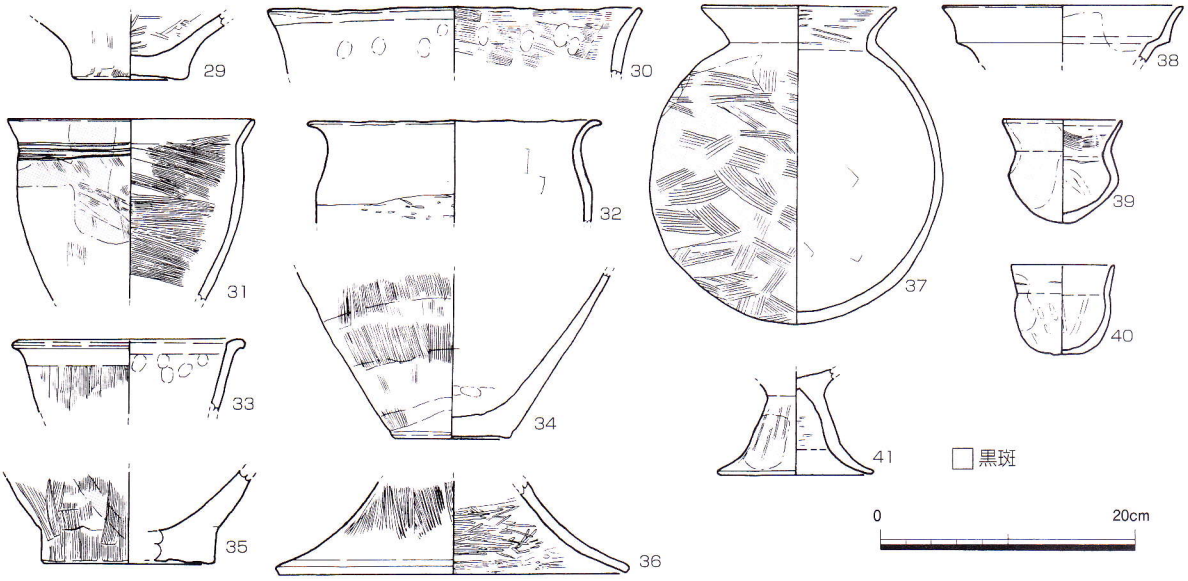
江戸時代末期の遺構群は、土坑２・３、溝６を検出した。土坑３は南北幅２m、東西幅1.4m以上、深さ約65cmを測るもので、遺構の掘削状況などから粘土採掘坑の可能性が考えられる。埋土から備前焼（擂鉢、大甕）や常滑焼大甕、中・近世土師器、瀬戸美濃系天目茶碗、肥前系陶磁器などが出土した。

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、輸入磁器、国産陶磁器、瓦、石器・石製品、金属器、木器、自然遺物などが遺物収納コンテナ30箱分出土した。

１～36は弥生土器である。１～５は壺である。１～３は広口壺であり、１は口径26.4cm、外面頸部上半はナナメ方向のハケ、下半はタテハケ調整の後、８条以上のヘラ描沈線が施されている。２は口径16.2cm、口縁部は玉縁状を呈する。３の外面はタテハケ調整後、頸部に９条のヘラ描沈線、刺突文、ヨコ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向のハケ調整後、タテ方向のヘラミガキが施されている。４・５は底部である。４の底部径12.2cmで、外面はタテハケ調整、５は底部径７cmを測るもので、それぞれ上げ底状のものである。６～22は甕である。６は口径28cmで、外面はヨコ方向のケズリ後タテハケ、口縁部内面はヨコハケを施している。７は口径21.4cmで、外面はタテハケ後、頸部に６条のヘラ描沈線、口縁部端面には刻目が施され、体部内面には炭化物が付着している。８は口径17cmを測る小型のもので、頸部に９条のヘラ描沈線、その下の体部にヘラ描きの「ハ」字状の記号のようなものもみられ、口縁部端面には刻目が施されている。９は外面タテハケ後、頸部に６条のヘラ描沈線、口縁部端面には刻目が、また口縁部内面はヨコ方向のヘラミガキが施されている。10は口径20.8cmで、外面にはタテハケ調整を施している。11は口径17.2cmを測る小型のもので、外面全体に炭化物の付着がみられる。12は口径18.8cmで、外面上半はナナメ方向、下半はタテ方向のナデの後、一部にナデ消しがみられる。内面は板状のナデ調整で、炭化物が付着している。13～22は紀伊型甕である。13は口径23.3cm、14は口径21.1cm、器高24.1cm、底部径6.3cmである。外


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
□黒斑
0
20cm

遺物実測図



遺物実測図

面体部上半はヨコ方向、下半はナナメ方向のヘラケズリが施されている。15は外面体部上部２/３に不定方向のハケ後、下部１/３はヨコ方向のヘラケズリを施している。16は口径24cmで、外面はナナメ方向のハケ後ヨコ方向のヘラケズリである。17は口径22.2cmで、外面は右下から左上方向のヘラケズリである。18は口径22.5cm、19は口径20.6cm、20は口径21.8cmである。18～20の外面はヨコ方向のヘラケズリである。21は口径17.2cmで、外面体部にはヨコ方向のヘラケズリが施されている。22の口縁端部は面をもつものである。23～27は鉢で、口縁部が内湾する23～25と外反する26がある。23は口径23.4cmで、体部上半はヨコハケ、外面下半はヨコ方向のヘラミガキである。24は口径18.7cmで、外面にヨコハケがみられる。25は口径8.6cm、器高7.9cm、底部径6.1cmである。手づくね成形とみられ、外面にはススが付着している。26は口径12.4cmで、外面はタテハケ、内外面にススが付着している。27は底部径8.6cmを測る上げ底状のものである。外面はタテハケ後ナデ調整である。28は口径21.3cm、器高10cmを測る蓋である。外面上半はタテ方向、下半はヨコ方向のヘラミガキ調整で、内面はナナメ方向のヘラミガキ調整である。

１～28は溝16からの出土で、紀伊第Ⅰ様式の３段階とみられる。

29は底部径8.6cmの壺で、内底面にはヘラミガキがみられ、30～35は甕である。30は口径29cm、外面にはユビオサエ、内面はヨコハケ後ユビオサエがみられる。31は口径19.4cm、外面頸部上半はナナメ方向、下半はヨコ方向のハケ調整である。口縁部と体部の境目に３条のヘラ描沈線が施され、外面体部上半に黒斑がみられる。32は口径24.7cm、外面は粗いヨコ方向のヘラケズリ調整であり、口縁部の屈曲が著しい。33は口径17.7cm、外面はタテハケがみられ、口縁部端面は玉縁状となっている。34・35は底部である。34は底部径９cm、35は底部径13.2cm、外面はそれぞれタテハケ調整である。36は口径28.2cmを測る蓋である。外面は粗いタテハケ、内面はヨコ方向のヘラミガキが施されている。口縁部内端面には帯状にススが付着している。

29～36は土坑25からの出土で、紀伊第Ⅰ様式の３段階とみられる。

37～41は土師器である。37は口径15.2cm、器高25.2cmの広口壺で、外面は不定方向のハケ調整で、体部下半に黒斑がみられる。庄内併行期のものと考えられる。38は口径19cmの二重口縁壺、39・40

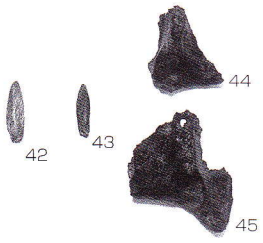
は小型丸底壺である。39は口径9.4cm、器高82cmを測るもので、口縁部内面は粗いヨコハケ調整である。尖底であることから器台と組合わさるものとみられる。40は口径8.1cm、器高7.1cmである。41は高杯の脚部である。これらは土坑16からの出土である。

このほかの遺物について、瓦は室町時代から江戸時代の丸瓦や平瓦の破片が出土しており、大半は土坑３からのものである。

石器・石製品では、大別すると打製石器、磨製石器、礫石器や石材などがある。打製石器ではサヌカイト製の石錐やスクレイパーが出土している。磨製石器では粘板岩製石包丁や結晶片岩製石包丁などがあり、未製品のものもある。礫石器では、砂岩製の砥石、叩石、磨石、台石、凹石、石錘、結晶片岩製の石錘などが出土している。石材ではサヌカイトの石核や剥片など、その他石英製火打石なども出土した。石造物では砂岩製の茶臼（上臼）が土坑３から出土している。

木器は柱材、炭化した杭や加工不明品などがあり、大半は溝16からの出土である。

自然遺物については、42・43は鹿の角で、加工痕がみられることから骨鏃の可能性がある。44・45は鹿の頸部第１脊椎骨で、44は右、45は左の部位である。この他、魚骨、魚歯、炭、貝殻、種子（桃核など）が出土した。



鹿角・鹿骨

まとめ

今回の調査地は、太田・黒田遺跡のほぼ中央部に位置し、合計６面の遺構面を確認し、弥生時代前期から江戸時代にかけての遺構・遺物を検出した。

第６遺構面において検出した溝16は、形状がL字状を呈するなどから方形周溝墓の周溝の可能性が考えられる。方形周溝墓とするならば調査区の北東部分に堆積する第８層は、細片であるが遺物を包含することや土層堆積状況の観察などから墳丘の盛土である可能性も考えられる。そうした場合、溝16覆土内の紀伊第Ⅰ様式併行の多量の土器や石器、自然遺物などの遺物は、供献物であった可能性が考えられる。また、落込み状遺構６及び溝15について、その方向性や覆土の土質などから、溝16に対応する周溝である可能性が考えられ、それらが周溝であったならば、溝16と落込み状遺構６の空白部分については、陸橋部分と理解することもできる。

これにより本調査地点は、弥生時代前期に墓域が展開していた可能性があり、弥生時代前期から中期にかけての様相について明らかにすることができた。

以上、今回の調査成果の中で特に重要視された弥生時代前期の遺構についてふれてきたが、中期の遺構面である第２遺構面から第４遺構面は、出土遺物からあまり時期差がみられないものと推察される。

（奥村　薫）

【註】自然遺物については、大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学安部みき子氏の鑑定による。

4．太田・黒田遺跡第55次調査

調 査 地　　和歌山市太田字城跡479－1番地

調査面積　　40㎡

位置と環境

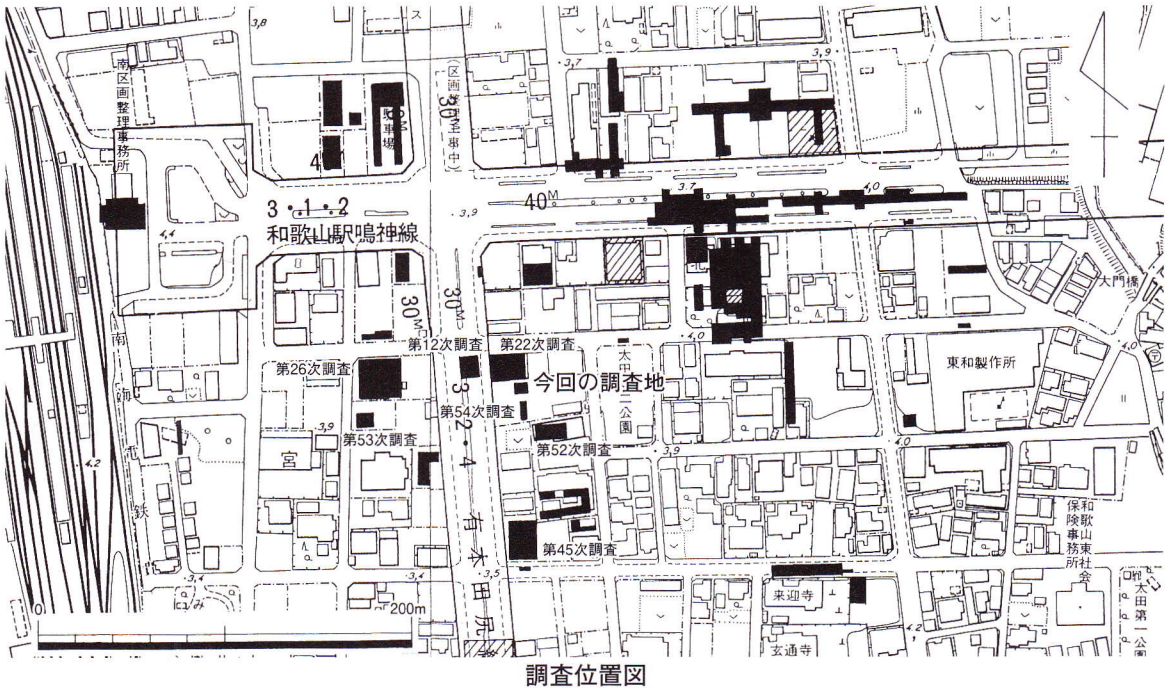
太田・黒田遺跡が立地する和歌山市太田及び黒田周辺から秋月・鳴神地域にかけては、和歌山平野部のなかでも標高４ｍ前後を測る微高地にあたる。太田・黒田遺跡では過去54次を数える調査において、弥生時代前期の環濠や竪穴住居、中期の竪穴住居や井戸など多数の遺構が検出されており、遺物では直柄広鍬や一本平鋤などの木製農耕具、さらに銅鐸や銅鏃などの金属器のほか、絵画土器（鹿）を含む多量の弥生土器などが出土している。また弥生時代以降では、古墳時代から江戸時代までの遺構及び遺物が多数みられ、室町時代には豊臣秀吉に水攻めされた太田城跡の推定地が含まれるものである。

今回の調査地の周辺では、北西約20ｍの第12次調査において弥生時代中期の井戸や古墳時代前期の土坑、また北側隣接地の第22次調査において弥生時代中期の竪穴住居３棟や室町時代後期の大溝が検出されている。さらに南約30ｍに位置する第52次調査では、弥生時代前期末の井戸や中期の竪穴住居２棟、平安時代末から鎌倉時代の井戸や土坑などがみられ、同じく南約80ｍに位置する第45次調査では、弥生時代前期の環濠が２条検出されている。この環濠は、西約90ｍに位置する第26次調査検出の大溝に続くものと考えられている。

調査内容

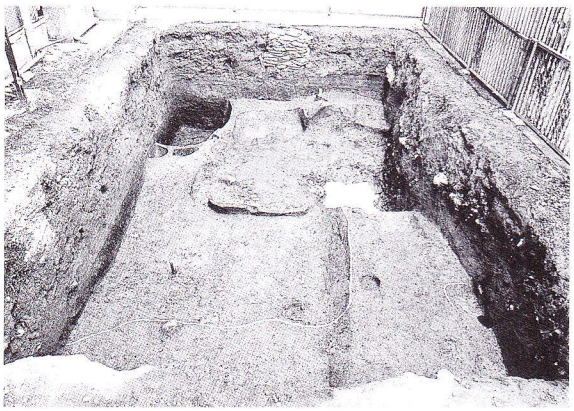
調査は、東西約８ｍ、南北約５ｍの東西に長い調査区を設定し行った。また調査区の西半部において、下層の遺構調査及び土層堆積状況を確認する目的で深掘調査区を設定し掘削を行った。

調査地の基本層序については、現表土が厚さ約85cmを測る造成土であり、第１・２層は近現代から近世にかけての耕作土である。第３層は、厚さ５～22cmを測る室町時代の遺物包含層とみられる



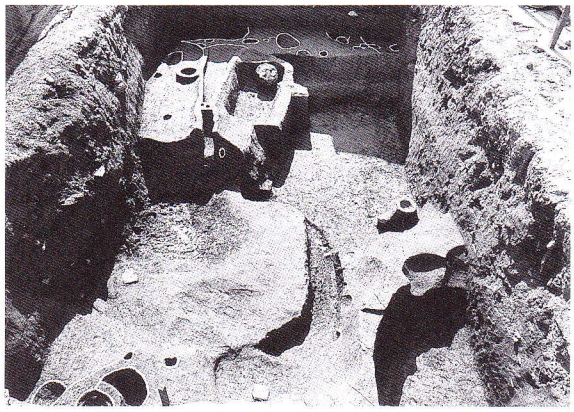
調査位置図

もので、この上面（第１遺構面）では地震に伴う噴砂を検出した。第４層は、厚さ20～26cmを測る古墳時代後期の遺物包含層とみられるもので、この上面（第２遺構面）では平安時代末から室町時代の土坑やピットなどを検出した。第５層は、厚さ約20mを測る弥生時代中期の遺物包含層とみられるもので、この上面（第３遺構面）では、弥生時代中期前半から中頃の土坑などを検出した。第６層は、厚さ13cmを測る弥生時代前期の遺物包含層と考えられるもので、この上面（第４遺構面）では、弥生時代前期末から中期初頭の土坑・ピットなどを検出した。



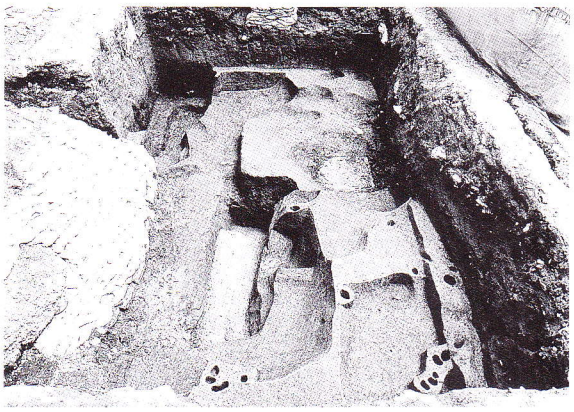
第２遺構面全景（西から）

第７層以下については深掘調査区において確認したもので、第７層は厚さ約20cmを測る明褐色系シルトである。また第８層は、黄橙色系シルトであり、この上面（第５遺構面）において弥生時代前期の土器を包含する溝を検出した。今回の調査では、第８層からは遺物が出土しなかった。



第３遺構面全景（東から）

遺構については、本調査において遺構検出面を５面確認し、弥生時代前期から室町時代にかけての遺構を検出した。まず第５遺構面では、幅1.5～1.7m、深さ約60cmを測る弥生時代前期の溝１条を検出した。また第４遺構面では弥生時代前期末から中期初頭の土坑６基のほか、杭穴12基を検出した。第３遺構面では、弥生時代中期前半から中頃の土坑７基のほか、ピットや杭穴を43基検出した。さらに第２遺構面では、平安時代末から鎌倉時代初頭の土坑１基、鎌倉時代の土坑４基や不定形な落ち込み１基、室町時代の土坑１基のほか、ピット７基を検出した。



第４遺構面全景（西から）

まとめ

今回の調査地は、太田・黒田遺跡のほぼ中央部に位置し、第26・45次調査で検出された弥生時代前期環濠の内側にあたる。調査の結果、弥生時代前期から室町時代までの遺構や遺物を検出した。また、遺物としては硯に転用された奈良時代の須恵器杯身が出土した。太田・黒田遺跡では、齋串が出土した７世紀前半の井戸や、和銅開珎42枚や万年通宝４枚などが出土した８世紀後半の井戸が確認されており、平安時代の須恵器円面硯も出土している。よって今回出土した須恵器杯身は、古代の太田・黒田遺跡の様相を示す遺物として注目されるものである。（藤薮勝則）

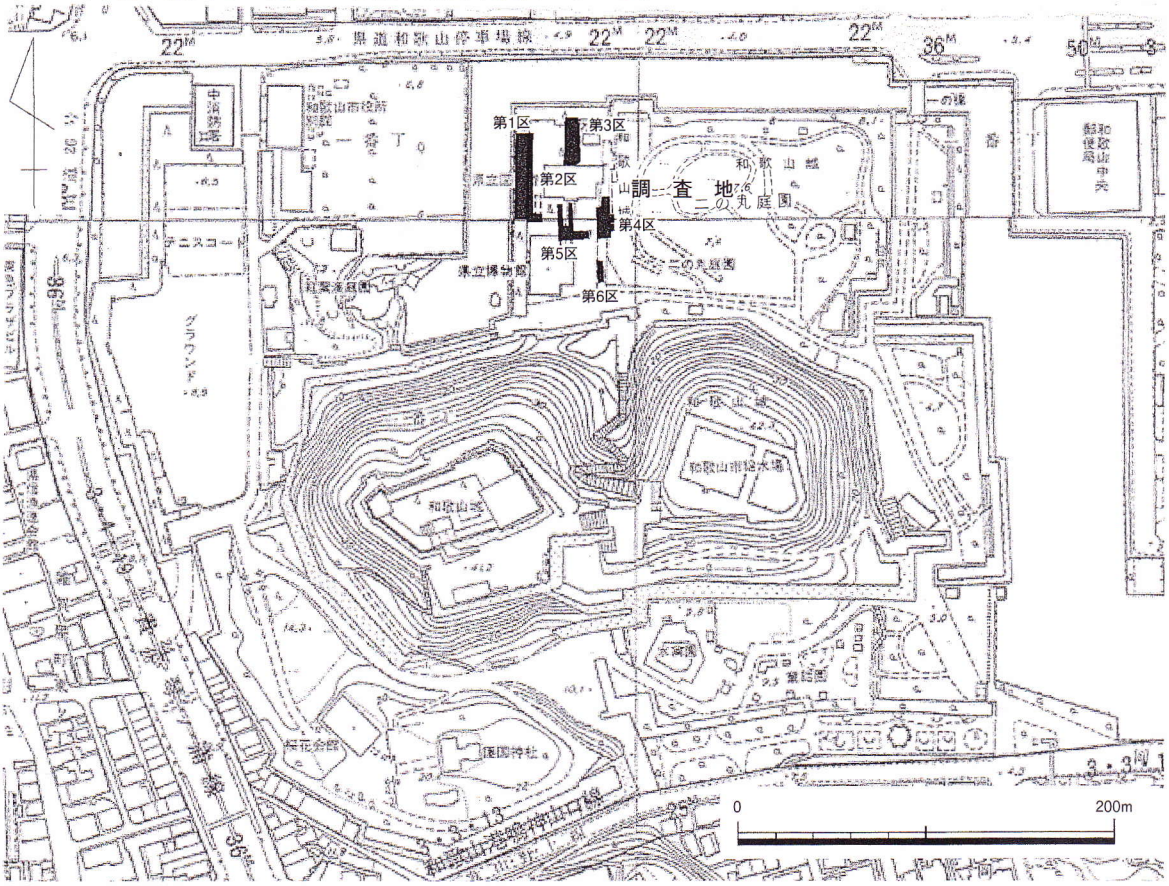
5．史跡和歌山城 第29次調査

調 査 地　　和歌山市一番町３番地内

調査面積　　740㎡

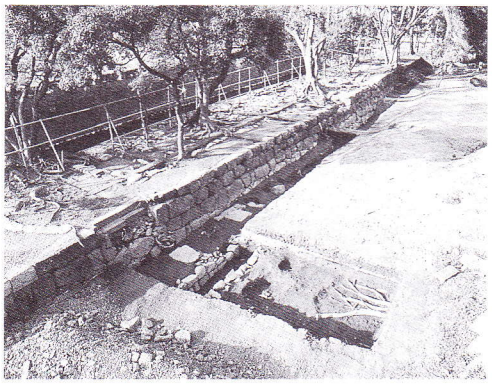
位置と環境

和歌山城は、紀ノ川河口南岸の和歌山平野の北西から南東へ走る吹上砂丘の北端にあたる標高約48.9mの独立丘陵である岡山に築かれている。この城は丘陵上に本丸と天守曲輪が双立し、その麓に二の丸、西の丸、南の丸、砂の丸などを配した典型的な平山城である。天正13（1585）年に紀州を平定した豊臣秀吉は、自ら縄張りを指示し、弟である秀長に領有させ、築城を命じ、築城には藤堂高虎を初めとする普請奉行が当たったとされる。秀長は大和郡山城に居城していた為、城代として桑山重晴を３万石で入国させた。しかし、創建時の史料はほとんど知られておらず、城の構造などの詳細は不明である。その後、慶長５（1600）年の関ヶ原合戦に勝利した徳川家康が大坂城の豊臣氏を牽制するため、戦功のあった浅野幸長を37万石で入国させた。城主となった幸長は、入国翌年の慶長６（1601）年に領内一斉の検地を実施しており、城内及び城下町の形成状況は浅野家の編年記録「済美録」や「諸事覚書」などの史料から窺える。元和５（1619）年に浅野家は広島へ転封され、徳川頼宣が55万5000石に加増された紀州の城主となった。入国後の頼宣は、元和７（1621）年から城郭及び城下町の拡張・整備に着手し、頼宣の藩主期にはほぼ幕末にみられる形に整ったようである。その後、５代藩主吉宗の時代には南の丸櫓台の改築が行われた他、その後の地震や火災などで倒壊、焼失した建物の再建が繰り返されている。



調査位置図

二の丸と西の丸間の堀に架けられていたとされる御橋廊下の創建年代については明らかでないが、『和歌山御城内惣御絵図』に描かれている18世紀末にはすでに存在し、明治初期までは架けられていたことが確認されている。


第１・２区　全景（南東から）

調査内容

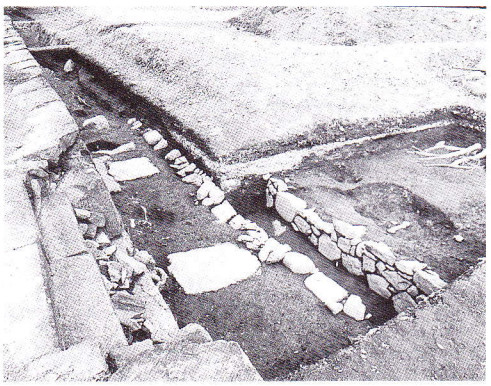
調査は、二の丸西端部櫓台上面と櫓台石垣裾部、二の丸内部の計６カ所の調査区を設定した。設定にあたっては旧県立図書館・博物館跡地を避け、絵図に描かれている建物の端部検出を主眼においた。これまでに実施された発掘調査では、近代の包含層下面で幕末の遺構面を確認できるが、その遺構と絵図の建物配置を照合させることによって建物配置、遺構の性格、絵図の精度、年代等を検証していくことが可能と考えられる。今回の調査対象地でも石垣上部には「多聞櫓」、二の丸西部には「局」や「御膳所」、「西御小座敷」等の大奥の施設が描かれておりこれらの関連遺構の検出が予測されたため、調査にあたってはその対応関係も考慮しながら実施した。

第１区　多聞櫓１（北東から）

調査区の基本層序は、調査地点により異なるが、第25次調査の際にもみられた二の丸西部に広域に分布する上下２層の火災整地層等を基準にして土層の対応をみた。

第１区　多聞櫓２（南から）

第１遺構面は文化の火災整地層の後に構築されており、第１区第２層下面、第２・４～６区第４層下面、第３区第３層下面がそれにあたる。幕末～明治初頭まで機能したとみられる。この第１遺構面より上層は近代以降の整地土である。なお第４区では第１遺構面の一部に敷かれた床面整備のためのシルト（第5a層）がみられた。第４区の第２遺構面は上層の火災整地層（第６層）の下面で確認しているため、明暦の大火（1655年）以降文化の火災（1813年）までと考えられる。第３遺構面は第８層上面で構築されており、遺構埋土の火災整地土から二の丸拡張（1621年）以降明暦の大火（1655年）までの時期が想定できる。


第２区　溝３（南西から）

二の丸西部の櫓台上である第１区では、第２層下面において駿河櫓南端部、多聞櫓２棟、土塀の基礎石組、通路にあたる砂利敷を検出した。これらは『和歌山御城内

惣御絵図』に描かれている駿河櫓、多聞櫓と対応するものである。

櫓台石垣の東裾部に位置する第２区では、石組溝と階段遺構を検出した。共に近代の整地土を除去した第６層上面で検出したものである。なお、旧県立図書館の影響で調査区中央部が撹乱された状態であったが、この部分では撹乱断面において第７層上面から切り込む瓦溜りを確認した。また東面石垣の一部分について石垣基底部の検出を行った。

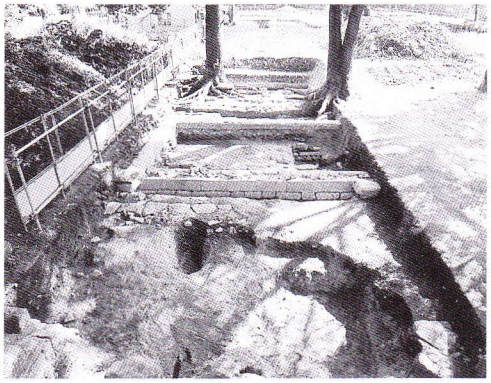
第３区では、第１遺構面（第４層上面）において、基礎石組・石組溝、砂岩礎石列、根石を検出した。また遺構や撹乱断面等の観察から第２遺構面（第５層上面）で構築されている基礎石組と石組溝を確認した。特に第１遺構面の基礎石組と石組溝は、第２遺構面段階の遺構の直上に石材を積み足して構築されていることが明らかとなった。

第４区では第４層下面において、結晶片岩石列・砂岩布石列、石組溝等、第６層下面において砂岩礎石列を確認している。その他サブトレンチの断面観察も合わせると合計３面の遺構面を確認しており、二の丸西部の拡張以前の遺構として浅野期とみられる石垣の一部を検出した。

第３遺構面の遺構埋土には赤褐色シルトが、第２遺構面遺構埋土及び直上の第６層には炭を多く含んだ粗砂が堆積しているが、この上下２時期の火災を窺わせる状況は二の丸西部の石垣上面（第25次調査）と同様である。これらの火災を文献記録に当てはめて考えると、第３遺構面時は明暦の火災（1655年）、第２遺構面時は文化の火災（1813年）に比定できる。

第５区は大半が旧図書館・博物館の撹乱を受けていたが、調査区東側では第６層上面において砂岩礎石と石列、土坑を検出した。下層遺構確認のためにサブトレンチを設定し調査を行ったが、遺構の切込み等は確認できなかった。

二の丸南側にあたる第６区では、第６層上面で砂岩礎石を１基検出した。また調査区東半は撹乱を受けていたが、断面観察により下層遺構を検出した。



第３区　全景（北から）

第３区　砂岩礎石列（南西から）

第４区　全景（南から）

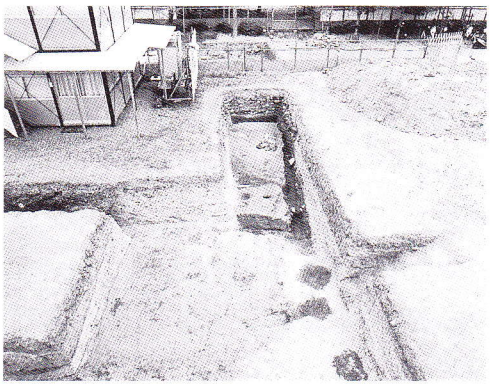
第４区　石列（北東から）

遺物は遺物収納箱（コンテナ）に304箱を取り上げており、その大半が丸・平瓦の瓦類である。瓦以外の遺物としては、江戸時代の土器・陶磁器、釘や鏃等の金属器、硯等の石製品、漆喰、貝殻、また近現代の陶磁器やガラス等が出土している。遺物は近代の包含層や撹乱出土のものが９割以上を占めており、溝や土坑等の遺構出土のものはわずかである。

第４区　埋没石垣（南西から）

まとめ

調査の結果、二の丸西部の建物様相について新たな知見を得ることができた。特に全ての調査区で近代の遺物包含層下面の遺構（第１遺構面）を確認したことから、幕末期の建物配置が明らかになりつつある。それに対して下層の遺構は撹乱や断割調査等による部分的な確認にとどまっている状況である。

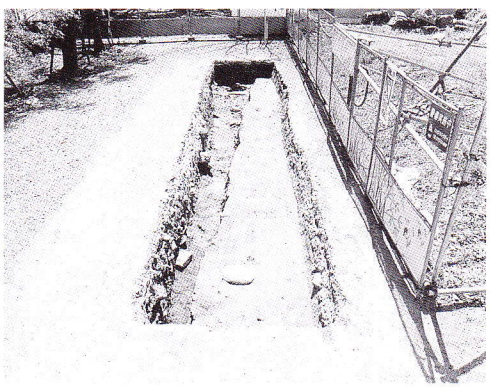


第５区　全景（西から）

文化の火災について、大奥の南半と西側石垣上櫓台が焼失したことを発掘調査の成果からも推定することができた。また、発掘調査で検出した遺構と６尺５寸で描かれた『和歌山御城内惣御絵図』の二の丸建物の位置関係は概ね一致することを確認することができた。しかし、合致しない部分（第４区の結晶片岩石列と砂岩布石列の据付など）もあることから、絵図との時期差も考慮して建て直しや増築等の改変を検討していく必要があるといえる。

第５区　砂岩礎石列及び土坑１（東から）

西の丸の遺構について、遺構の残存状況は必ずしもよいとはいえない状態であったが、その中でも江戸時代末期から明治時代初頭の遺構として砂岩礎石列や土坑２を確認することができた。その検討から、『和歌山御城内惣御絵図』の縮尺が西の丸南側については１間＝６尺であること、絵図と遺構の位置関係はほぼ合致することが明らかとなった。　（北野隆亮）



第６区　全景（北から）

6．神前遺跡 第４次確認調査

調 査 地　　和歌山市神前516・524番地他

調査面積　　50㎡

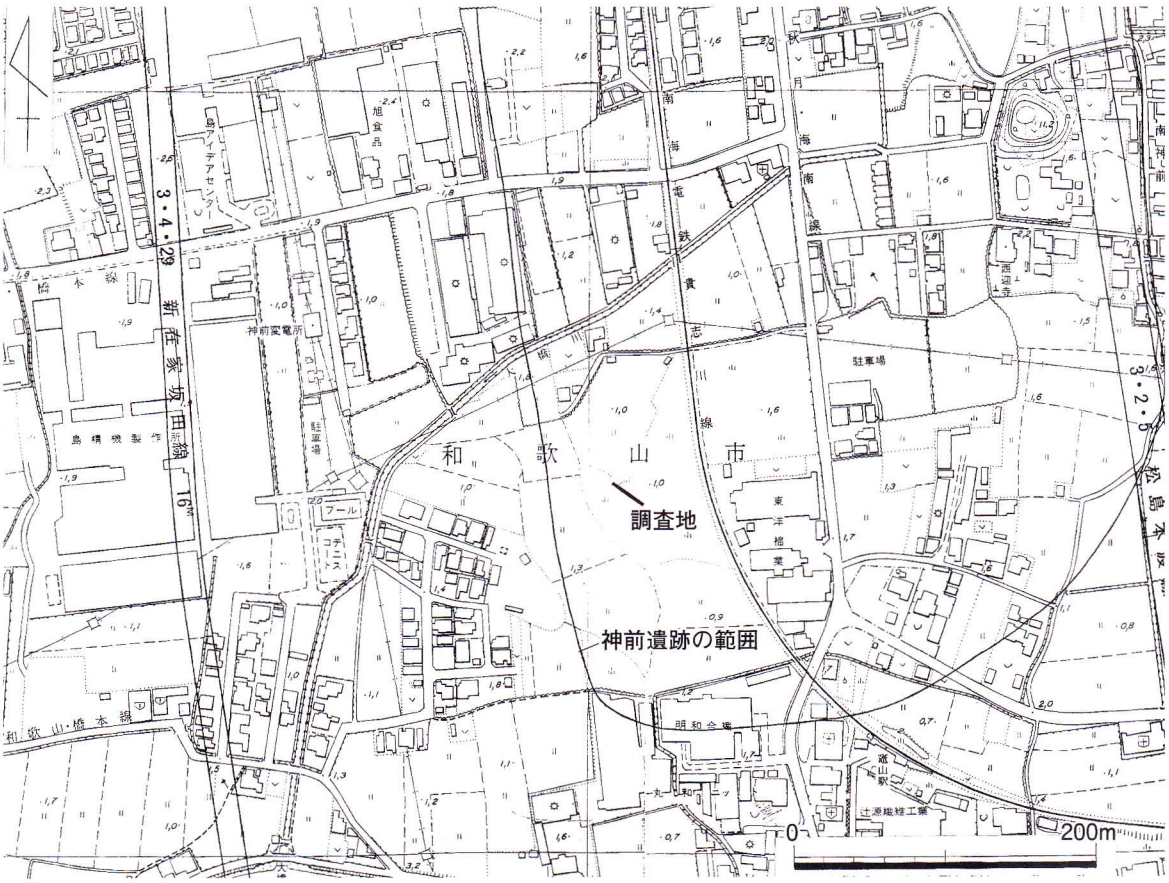
位置と環境

神前遺跡（遺跡番号307）は、和歌山市域のほぼ中央部、紀ノ川の南岸に所在する。この南岸には東西に連なる岩橋山塊があり、その最も西端である独立山塊の福飯ヶ峯（標高約100m）の西側平野部に位置する。当遺跡の南側には和歌山市東山東地区の谷部にその源をもつ和田川が西流する。この和田川によって形成された沖積平野を中心として遺跡が立地する。

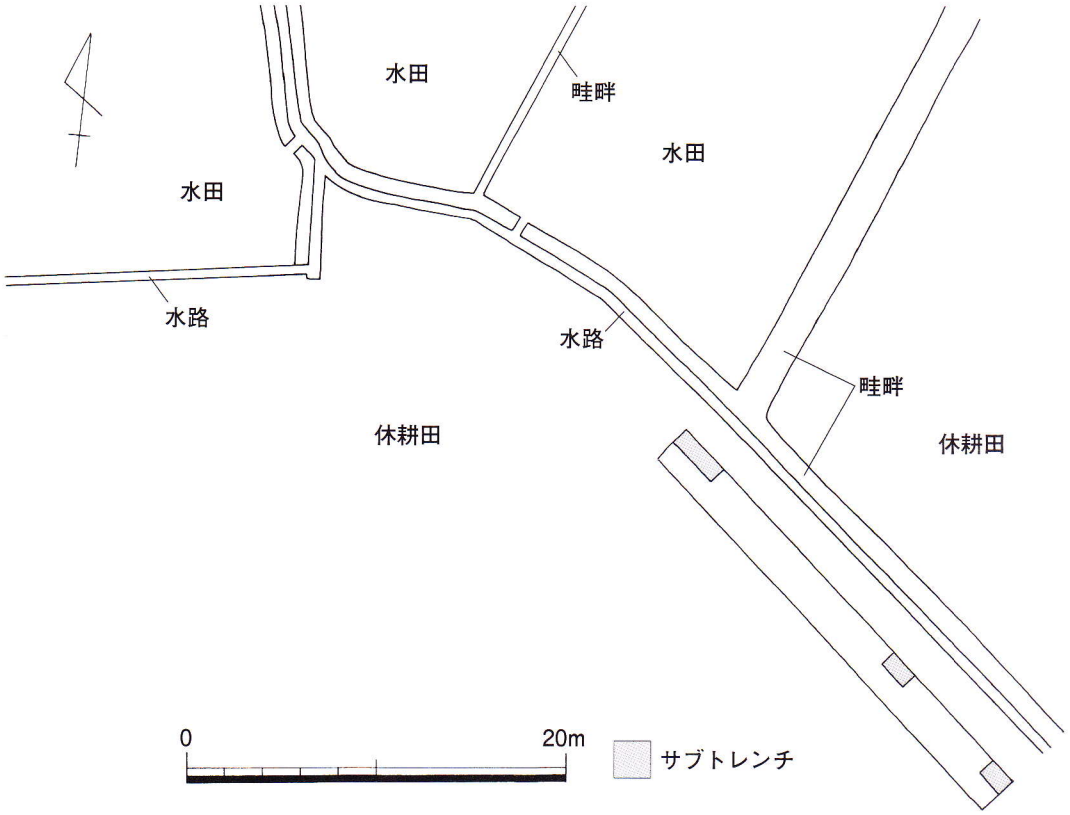
調査内容

今回の調査は、遺跡南西部において造成工事が行われることになり、この工事に先立つ確認調査を実施することとなった。調査地は、遺跡南西部に位置する水田地帯に位置する。調査地の現況は休耕田にあたり、葦が生い茂る状況であった。この状況から、葦を重機によって取り除き、造成後の深掘予定範囲に調査区２×25mの調査区を設定した。重機による掘削は、表土である耕作土と希薄な遺物包含層である第２層について慎重に行い、第２層に含まれた遺物の採集を行った。また調査区内の３ヶ所にサブトレンチを設定し、下層の状況確認を行った。人力による調査は、北東壁面の精査と第３層上面における遺構検出を目的とした。

基本層序は、表土（第１層）に厚さ15～20cmの厚みをもつ水田耕土（現水田面の標高は1.3m）



調査位置図



調査区周辺の全体平面図

がある。第２層は、緩やかに南東部に向かって下降する土層で、厚さ10～25cmの厚みをもつ。この土層には古墳時代の土師器が含まれていることから、当該期の遺物包含層と考えられる。第３層は、第２層と類似する土層で、砂質が強く遺物は含まれていない。サブトレンチで確認した第４層は、自然堆積層と考えられる灰色細砂で常時湧き水があった。第３層上面における遺構検出の結果、当調査区内では遺構は検出できなかった。また第２層に包含する土器には摩滅が著しいものが多く、北東部の遺跡中心部から後世の水田開発等によってもたらされたものと考えられた。出土した遺物はすべて第２層からのもので、破片点数約50点を数える。遺物内容はすべて古墳時代前期から中期にかけての土師器である。

まとめ

今回の調査地は、神前遺跡範囲の南西部に位置し、水田面の標高が1.0m前後の微低地部に相当する。当遺跡における既往の調査は、遺跡範囲の東部から中部にかけて行っており、唯一第２次調査が西部にあたる。この調査は小規模であったため、正確な時期等の成果は得られていなかった。また南西部の調査は今回が最初であり、その状況は第２次調査に類似する希薄なものとして位置づけられる。このことから、今回の調査では古墳時代の遺物散布はみられたものの、状況から考えて集落の縁辺部にあたるものと考えられよう。　（井馬好英）

【参考文献】『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成16年度－　財団法人和歌山市教育委員会　2006年

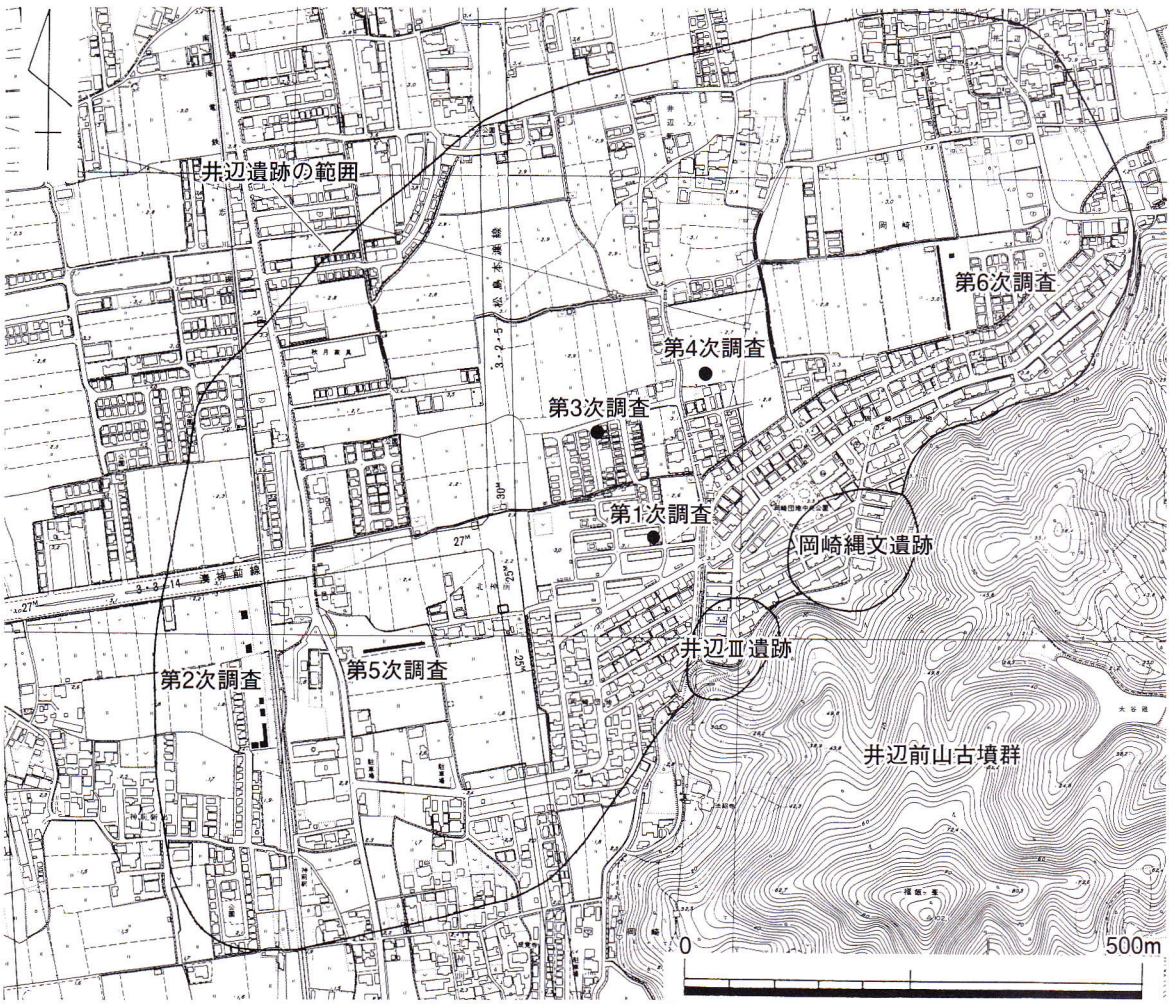
7．井辺遺跡 第５次調査

調 査 地　　和歌山市神前字舟田121－1・2番地内

調査面積　　140㎡

位置と環境

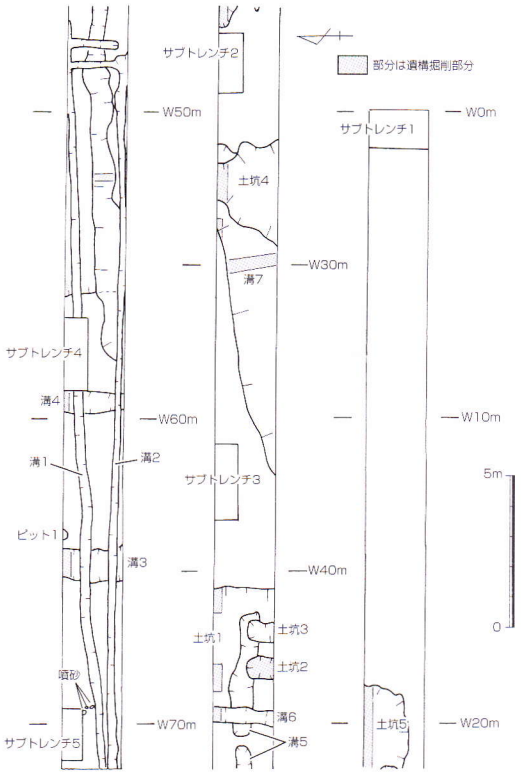
井辺遺跡は、紀ノ川南岸の和歌山平野南東にそびえる岩橋山塊西端の半独立丘陵である福飯ヶ峰の北西山麓部から平野部にかけて位置する遺跡である。当遺跡範囲は東西約1.2km、南北約500mであり、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物散布地として知られている。周辺の遺跡としては、遺跡の南に接する神前遺跡や東側に隣接する井辺前山古墳群など、また東側約２kmの範囲内には花山古墳群、岩橋千塚古墳群などが位置し、周辺は県内でも遺跡が最も密集している地域であるといえる。1964年の第１次調査では、遺跡中央部において２列の弥生時代後期の土器列と井戸１基が検出された。また、1996年には西側縁辺部で第２次調査を行い、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての落込状自然地形を検出した。その後、遺跡中心部で小規模な調査が行われ、第３次調査（1996年）で古墳時代初頭の土坑３基、第４次調査（1998年）で古墳時代初頭の土坑２基が検出された。



調査位置図

調査内容

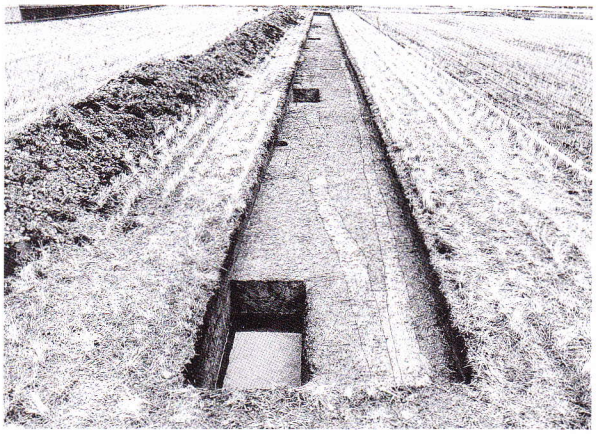
調査地は、遺跡南西部に位置し、現況は水田であった。調査は、幅２ｍで東西方向に延長約70ｍの面積約140㎡の調査区を設定した。調査地の地表面標高は2.3ｍを測る。第１層は厚さ約30cmの水田耕土である。第２層は厚さ5～10cmの黄褐色シルトで、第３層は厚さ10～20cmの黄灰色粗砂混シルトで、この層の上面が遺構検出面である。第４層は厚さ10～20cmの暗灰黄色シルトで、第２～４層はW23m付近を中心に東と西にそれぞれ下降する傾斜をもって堆積している。第５層は厚さ20cm以上のにぶい黄褐色シルトで、東から西に下降する傾斜をもって堆積する。第６層は灰オリーブ粗砂である。第４層以下の堆積層からは遺物が出土しなかった。



遺構全体平面図

第３層上面において古墳時代と鎌倉時代の２時期の遺構を検出した。古墳時代の遺構は、土坑１～５、溝３～７、ピット１を検出した。

鎌倉時代の遺構は溝１と溝２である。調査区西端から北側に溝１、南側に溝２がほぼ平行して掘削されており、東に約23ｍ地点で直行方向に２本の枝溝を延ばし連結されているものである。なお、調査区西端部で噴砂の砂脈を検出した。噴砂は、古墳時代以降で鎌倉時代までの時期のものと考えられる。



調査区全景（西から）

出土遺物は土師器壺・甕・高杯、須恵器甕、瓦器椀・皿、中世土師器皿などである。遺物の時期は古墳時代と鎌倉時代のものに二分することができる。

まとめ

今回の調査では、第３層上面において古墳時代と鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。本調査地は井辺遺跡範囲の南西部に位置し、古墳時代の土坑５基、溝５条など多くの遺構を検出したが、遺跡中央部で行われた第３・４次調査の所見と比較した場合、第３・４次調査ではそれぞれ古墳時代前期の土坑が検出されており、その場所が古墳時代の集落の中心部であるとみられ、本調査地は古墳時代の集落縁辺部である可能性が考えられる。鎌倉時代の溝２条は、その形状や覆土の性質などから農耕に関わる遺構とみられるが、遺物が比較的多く出土することから鎌倉時代の集落が近辺に存在するものと考えられる。

（北野隆亮）

8．木ノ本Ⅰ遺跡 確認調査

調 査 地　　和歌山市西庄30・31番地

調査面積　　50㎡

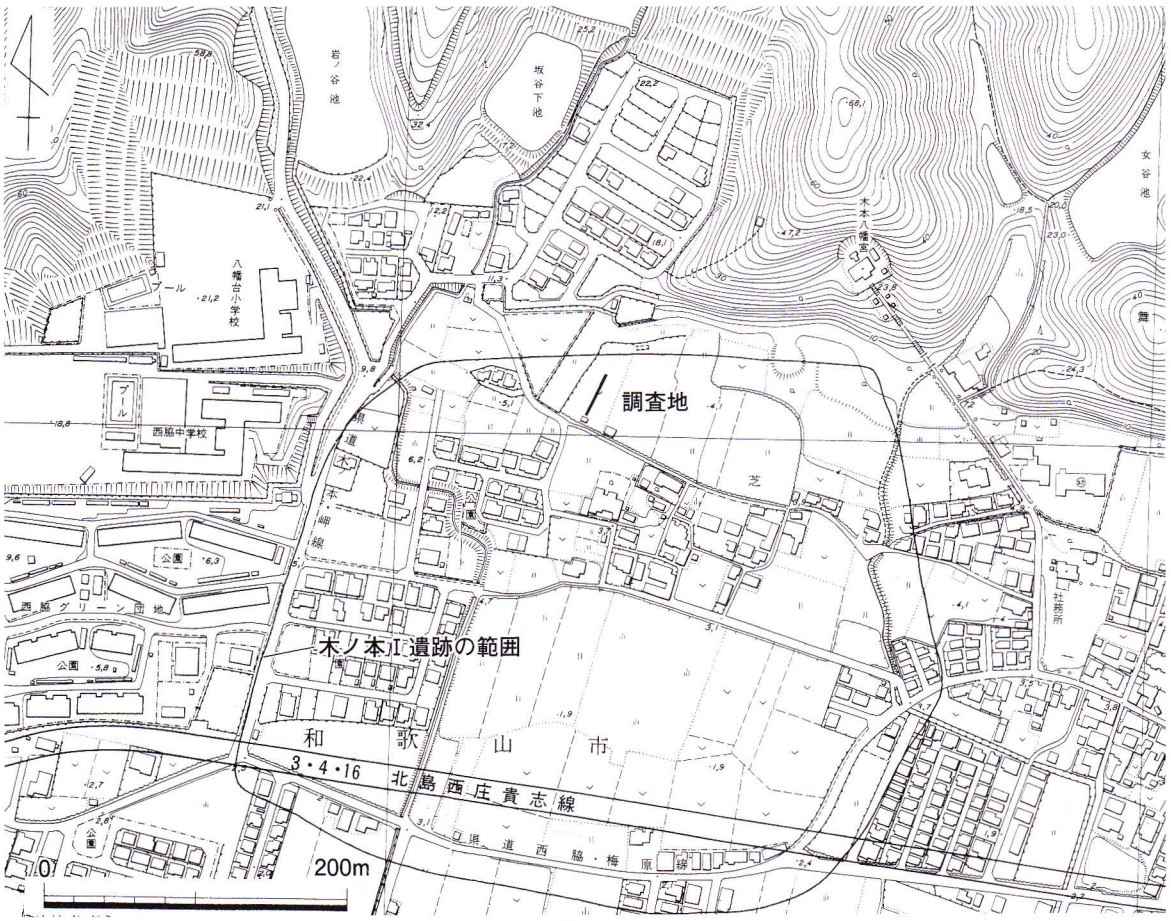
位置と環境

木ノ本Ⅰ遺跡（遺跡番号40）は、和歌山市の北西部、和泉山脈南麓裾部に位置する。遺跡は、猿坂峠から南に流れる小河川によって形成された標高約5.8mの扇状地に立地する。この周辺は、和泉山脈の裾部にそって東から木ノ本Ⅲ遺跡、木ノ本Ⅱ遺跡、木ノ本Ⅰ遺跡、西庄Ⅱ遺跡、平の下遺跡、西庄遺跡と遺跡が連なり、紀ノ川河口域北岸の遺跡の密集する地域として位置づけられる。

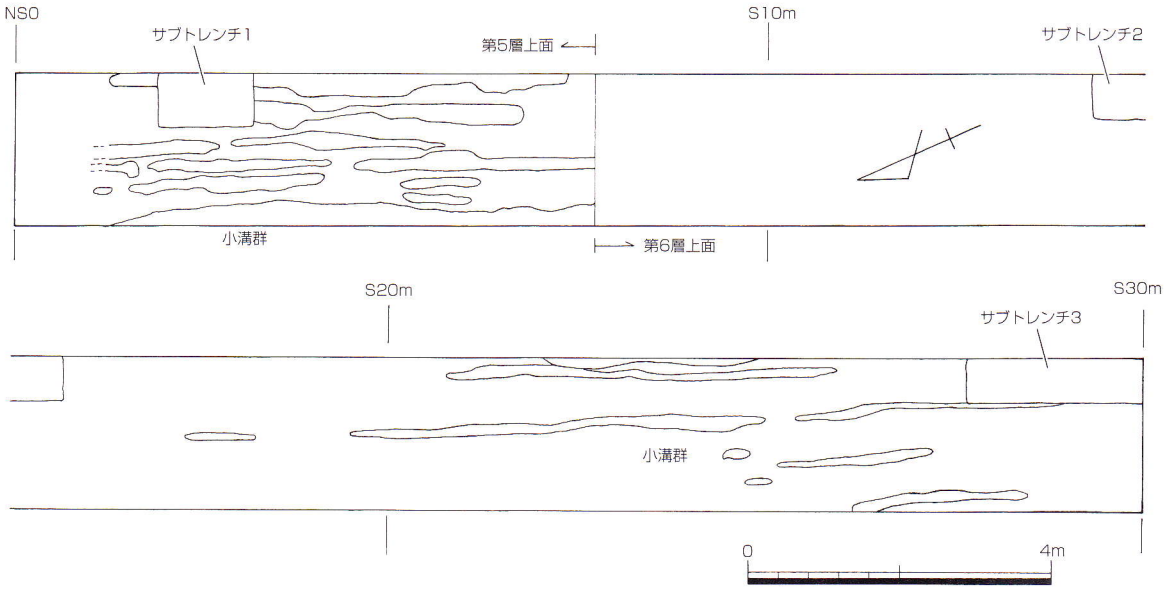
調査内容

今回の調査は、遺跡北端部において造成工事が行われることになり、この工事に先立つ確認調査を実施することとなった。調査地は、遺跡北部に位置する住宅地に囲まれた水田である。調査区は、造成工事後の汚水管埋設予定部分に幅２m、総延長30mを設定した。重機による掘削は、表土である耕作土（第１層）と希薄な遺物包含層である第２～４層について慎重に行い、これらの土層に含まれた遺物の採集を行った。また調査区内の３ヶ所にサブトレンチを設定し、下層の状況確認を行った。人力による調査は、東壁面の精査と第５・６層上面における遺構検出を目的とした。

調査地の基本層序は、まず表土に厚さ15cm程度の厚みをもつ水田耕土（第１層）がある。第２・



調査位置図



遺構全体平面図

3層は類似する粗砂層で、北から南に向かって薄くなっていく傾向を示す。第4層は、厚さ5cm程度の厚みをもつ黄褐色系の細砂混シルトで、中世土師器及び瓦器が比較的多く出土した。第5層は、厚さ5～10cmの厚みをもつ黄褐色系の粗砂混シルト層で、土師器及び須恵器が出土した。第6・7層はサブトレンチ内においてその状況を確認した黄褐色系のシルト質層で、今回の調査では遺物の出土が認められず無遺物層と考えられる。土層堆積の特徴として、第1・2層上面が南に向けて下降するのに対し、第3層より下位にあたる土層上面は北に向けて緩やかに下降する傾斜をもつ。

遺構は、第5層上面では耕作に伴うと考えられる南北方向の小溝を9条検出し、第6層上面では第6層から掘り込まれた遺構は検出できず、上面の第5層に対応する小溝群の残欠8条のみが検出できた。これらの小溝は、幅5～30cm、深さ5～10cm程度のもので、瓦器及び中世土師器等が出土したことから中世の範疇に含まれるものと考えられる。

出土遺物には、土器類として土師器、須恵器、中世土師器、瓦器があり、土器以外には江戸時代のものと考えられる瓦2点、古墳時代の有孔土錘2点などがあり、総点数約150点を数える。

まとめ

調査の結果、当調査地において検出した遺構は、中世の範疇におさまるものと考えられる小溝群のみであった。この小溝群は農耕に関係するものとみられ、中世には耕地としての土地利用が行われていたものと考えられる。また古墳時代以前の遺構面と考えられる第6層上面では、今回遺構は確認できなかった。しかし、直上層である第5層には古墳時代前期から後期にかけての遺物が含まれていることから、近接する地域に遺構等が存在する可能性が考えられよう。　　（井馬好英）

【参考文献】『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成16年度－　財団法人和歌山市教育委員会　2006年

9．直川地区埋蔵文化財試掘調査

調 査 地　　和歌山市直川160番地他

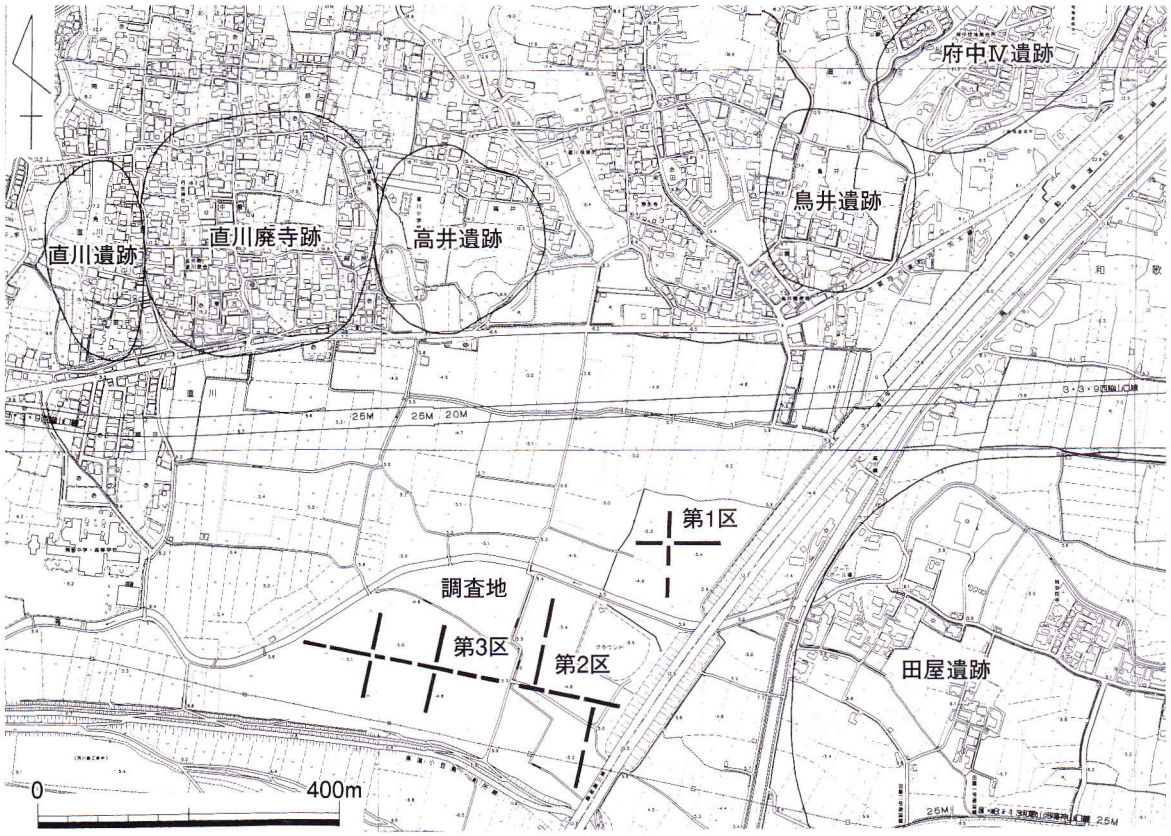
調査面積　　1841㎡

位置と環境

直川地区は、和歌山市の中央部、紀ノ川河口から約８km遡った北岸の沖積平野に位置する。この周辺は、標高5.2m前後の沖積平野部にあたり、広域な水田地帯の一角に立地する。従前、当地区は周囲を遺跡に囲まれた空白地帯であった。当地区の東方400mには古墳時代を中心とする集落遺跡である田屋遺跡をはじめ、西田井遺跡、北田井遺跡と広域である遺跡群が連なり、北方には府中Ⅳ遺跡、鳥井遺跡、高井遺跡、直川廃寺跡などが、さらに西方には六十谷遺跡、川口遺跡が位置する。このように、当地域は古代直川郷の中心地とされ、条里制の遺構が残るとされる地域でもある。

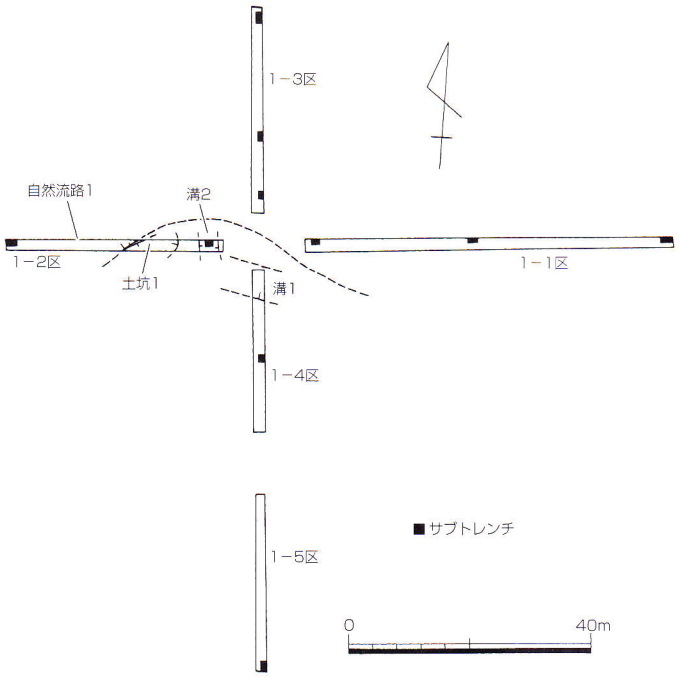
調査内容

調査対象地は、水田地帯の一角にあたる広域な荒蕪地であり、この対象地の中央部を六ヶ井用水が西流する。調査地は、道路及び水路を境として３ヶ所に分断されていたため、北東側の調査区から第１区とし、第３区まで順次番号を付して調査を行った。重機による掘削は、遺構面として捉えられる土層直上までを慎重に行い、遺構面が存在しないと判断した調査区に限り、自然堆積層と考えられる土層まで掘削を行った。そして、各調査区の掘削面における遺構検出を目的とした。また各調査区において数箇所のサブトレンチを設定し、下層の状況確認を行った。



調査位置図

基本層序は、調査対象地を東西に縦断する水路を境として第１区と第２・３区ではその様相が異なる。第１区では、地表下約0.8mの深さの第５層（暗灰黄色シルト）上面において奈良時代から平安時代にかけての遺構面を検出した。その上位に堆積する土層は、紀ノ川の沖積作用によって堆積したものと考えられた。第２・３区では、第１区と同様に沖積作用による堆積がみられたが、第５層に対応する安定した面が検出されなかった。また、地表下0.8～1.2mの第８層まで肥前系の陶磁器などが出土していることから、これより上位はすべて江戸時代以降の堆積と考えられる。



第１区　遺構平面図

遺構は、第１区において土坑１基（土坑１）、溝２条（溝１・２）を検出した他、自然流路１条（自然流路１）がある。出土遺物の時期及び遺構の切り合い関係などから、溝１は奈良時代後期、土坑１・溝２・自然流路１は平安時代前期を中心とした時期と考えられる。第２区では、自然流路５条を検出したが、いずれも正確な時期等の確認には至っていない。また第２区及び第３区の各所で噴砂を検出し、この噴砂を引き起こした地震は、江戸時代以前のものと考えられた。

出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、瓦、砥石などがあり、数量は遺物収納コンテナ２/３箱である。

まとめ

今回の調査では、第１区において奈良時代から平安時代にかけての土坑・溝などの遺構を検出した。これらの遺構を構成する遺跡範囲としては、その北側が平安時代の自然流路で削り取られていることから、１－１区～１－４区の範囲を含み北東及び北西方向に広がりをもつものと考えられる。このことから、当遺跡は南限のみが復原できる遺跡で、その広がりは北東部から北西部にかけて広がるものと推定できる。また周辺の遺跡からみて、東側に隣接する田屋遺跡の範囲が当調査地まで及んでいる可能性も指摘できよう。

第２・３区は堆積の状況からみて、旧紀ノ川の氾濫源に相当する地点とみられ、江戸時代に至るまで開発が及んでいない地域と考えられる。江戸時代以降、沖積作用に伴って水田開発が進められ、現代まで水田として活用されていたものといえる。また堆積の状況から、第１区との境にも大規模な自然流路が存在する可能性が考えられる。このことから、第１区との様相の違いも含めてこの第２・３区は遺跡の範囲外として位置づけられよう。　（井馬好英）

【参考文献】『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成16年度－　財団法人和歌山市教育委員会　2006年

10. 弘西地区埋蔵文化財試掘調査

調 査 地　　和歌山市弘西945番地他

調査面積　　160㎡

位置と環境

今回調査を行った弘西地区は、紀ノ川の河口から約10km遡った北岸に位置する。この調査地周辺は、標高8.0m前後の沖積平野部にあたり、広域な水田地帯の一角に立地する。この周辺には、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡である田屋遺跡・西田井遺跡・北田井遺跡等が所在するとともに北方には南海道が東西に走り、紀伊国府跡と推定されている府中遺跡が存在する。

調査内容

調査は、南北に並ぶ２枚の水田に東西２ｍ・南北80ｍの調査区を設定し、北側を第１区、南側を第２区として行った。機械掘削は新旧の耕作土（第１～３層）と遺物包含層の第４・５層について行い、第６層上面における遺構検出を行った。また、調査区内に８ヶ所のサブトレンチを設定して下層の状況確認を行った。

調査地の地表面標高は7.5ｍである。表土である第１層は20～25cmの厚さの水田耕作土である。第２層は10～15cmの厚みをもつ灰茶色粘質土、第３層は10～30cmの灰黄色粘質土である。第４層は

調査位置図

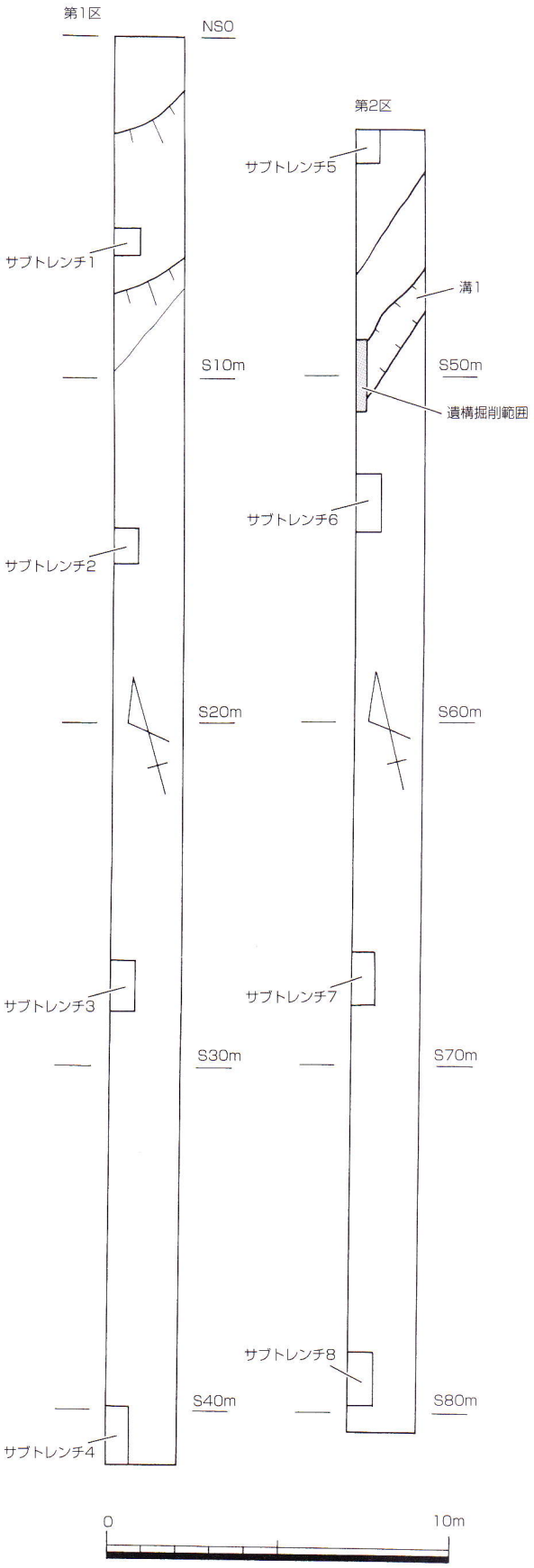
10～15cmの厚みをもつ灰茶色粘土で、第２区でのみ確認できた土層である。第５層は20～55cmの厚みをもつ淡灰褐色粘土で、出土遺物から鎌倉時代頃の遺物包含層と考えられる。第６層は15～20cmの厚みをもつ褐灰色粘土で、この上面から切り込む溝状遺構（溝１）を確認した。第７層は10～25cmの厚みをもつ灰褐色粘土、第８層は10～30cmの暗灰褐色粘土である。

遺構は、第２区において調査区を斜めに横断する幅0.8～1.0mの溝状遺構（溝１）を確認した。溝１は西壁面直下において部分掘削を行った結果、深さ約40cmで、断面形が「U」字形をなす溝状遺構であることを確認した。

まとめ

調査の結果、地形的には北西から南東に向けてゆるやかに傾斜する地山を検出し、この地山に沿うように各層がほぼ水平に堆積していた。そして、南側では徐々に堆積層が増してゆく状況が確認できた。また堆積層内で新たに遺物包含層の存在を確認した。遺物は第４・５層内に土師器や瓦器等の微片がわずかに含まれ、第８層内にも土師器の細片が少量含まれていた。これらの出土遺物の年代から、調査区の南東部に所在する弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡である北田井遺跡との関連よりは北部段丘上の南海道沿いに形成された遺跡群との関連を考えたい。

【参考文献】『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成16年度－　財団法人和歌山市教育委員会　2006年



遺構全体平面図

11. 井辺遺跡第６次調査

調 査 地　　和歌山市井辺字浮長112－１～５番地

調査面積　　140㎡

位置と環境

井辺遺跡は、紀ノ川南岸の和歌山平野南東にそびえる岩橋山塊西端の半独立丘陵である福飯ヶ峰の北西山麓部から平野部にかけて位置する遺跡である。詳細については、P.22を参照とする。

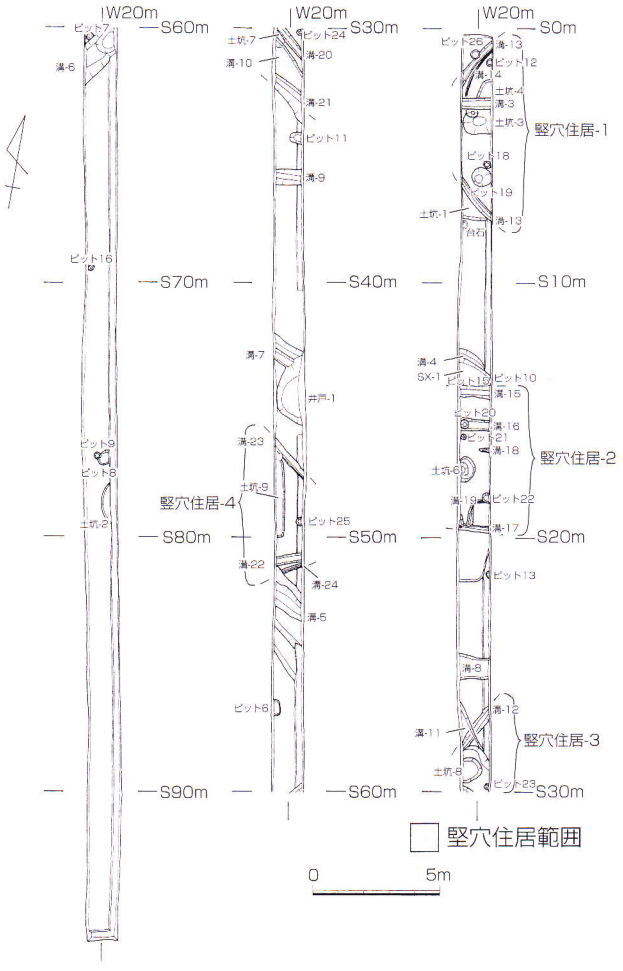
今回の調査地は、井辺遺跡の東部に当たり、福飯ヶ峯の丘陵裾から約200m～100mの水田地帯に位置する場所である。

調査内容

調査は、調査地西端の幅1.3m、延長95mを第１区とし、調査地北側の東西3.6m、南北4.2mを第２区と設定し、この２ヶ所の調査区について実施した。調査地の地表面標高は2.8mを測る。

第１層は厚さ約20cmの水田耕土であり、第２層は厚さ5～15cmの黄褐色シルトである。第３層は厚さ５～20cmの黄灰色シルトで調査区南側部分にみられる。第４層は厚さ５～15cmの黄褐色粗砂混シルトで、この層の上面が遺構検出面である。第５層は厚さ約10cmの暗灰黄色シルトである。第４・５層は弥生土器を包含する層で、ほぼ全域にみられるが、南端部には堆積がみられない。第６層は15cm以上の厚みをもつオリーブ黒色粗砂混シルトで、弥生土器の細片が含まれる。第７層は厚さ10cm以上の厚みをもつ黄褐色のシルトで、遺物は出土しなかった。

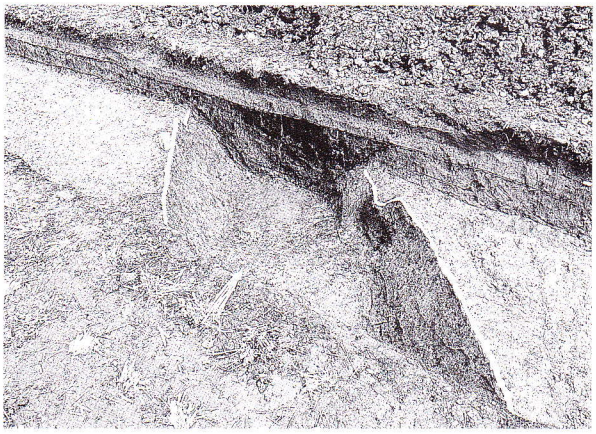
弥生時代後期から古墳時代前期の時期の遺構を検出した。弥生時代後期の遺構は井戸１基、溝１条、竪穴住居１棟などがある。井戸１は直径3.8m以上、深さ約80cmを測る擂鉢状の井戸である。底面近くには完形品を含む大量の土器が投棄されていた。土器の種類には壺、甕、鉢、高杯、器台などがみられ、なかでも鉢と高杯が比較的多い組成であり、井戸を廃絶するに際して、これらの土器を用いた何らかの祭祀行為を行った可能性が考えられる。溝６は、北東から南西方向に掘削された幅約1.2m、深さ45cmを測る溝であり、ここから南側は遺構が希薄となっており、集落範囲の縁辺部に掘削された溝と考えられる。竪穴住居１は第１区北端部で検出した平面形が円形の竪穴住居である。遺構の西半部分のうち、



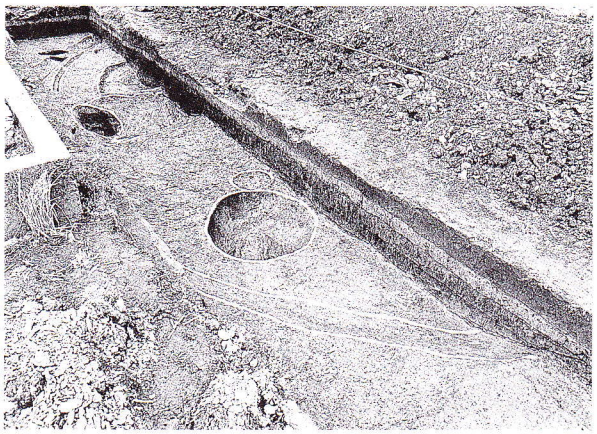
第１区遺構全体平面図

南北3.6m、東西1.2mの範囲を検出した。壁溝（溝13）を復原した場合、直径約８mを測る円形の竪穴住居を復原することができる。また、竪穴住居１は建て替えを行ったものと考えられ、古い段階は壁溝に溝14、貯蔵穴に土坑４を用いたとみられ、新しい段階には壁溝に溝13、貯蔵穴に土坑３を用いたものと考えられる。

古墳時代前期の遺構は溝４条、竪穴住居３棟などがある。溝５は第１区のS53m付近で検出した、北西から南東方向に掘削された幅約5.5m、深さ約30cmを測る溝である。竪穴住居は全て平面形が方形の竪穴住居である。竪穴住居２は第１区のS20m付近で検出したもので、南北5.8m、東西1.2mの範囲において、壁溝（溝15･17）、柱穴（ピット20～22）、炉（土坑６）、ベッド状遺構などを検出した。



第１区　溝６（南西から）



第１区　竪穴住居１（南西から）

竪穴住居３は第１区のS30m付近で検出したもので、南北6.2m、東西1.2mの範囲で検出した。覆土は全て削平されており、壁溝（溝12・21）、柱穴（ピット23・24）、貯蔵穴（土坑８）などを検出した。竪穴住居４は第１区のS50m付近で検出したもので、南北5.5m、東西1.2mの範囲で検出した。覆土は最大約30cmの深さが残存しており、壁溝（溝23・24）、柱穴（ピット25）などを検出した。

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器の壺・甕・高杯・鉢・器台、土師器の壺・甕・高杯などの土器類の他、土錘などの土製品や叩石、砥石などの石器・石製品が出土した。

まとめ

今回の調査では、第４層上面において弥生時代後期から古墳時代前期の遺構を検出した。遺構は、弥生時代後期、古墳時代前期前半、同後半の３時期に分けることができる。

弥生時代後期のものは、第１区北端で検出した竪穴住居（竪穴住居１）１棟及び同調査区中央部で検出した井戸（井戸１）１基、井戸１から南に15mの位置で検出した溝（溝６）１条がある。古墳時代前期前半のものは、第１区北半部で検出した竪穴住居（竪穴住居２～４）３棟であり、この時期まで集落が展開していると考えられる。古墳時代前期後半では、第１区北半部において、それまでの竪穴住居が廃絶した後に溝（溝５・7・10・11）が４条掘削されている。これらの溝は全て南東から北西方向のものであり、溝11から有孔土錘が３点出土していることなどから、本調査区周辺での土地の利用方法がこの時期に変更されたものと考えられる。

以上、今回の調査で、井辺遺跡範囲の西端部において、弥生時代後期から古墳時代前期の集落が展開することを明らかにすることができた。（北野隆亮）

Ⅲ．遺物整理報告

１．秋月遺跡 第９次調査遺物整理

調査の概要

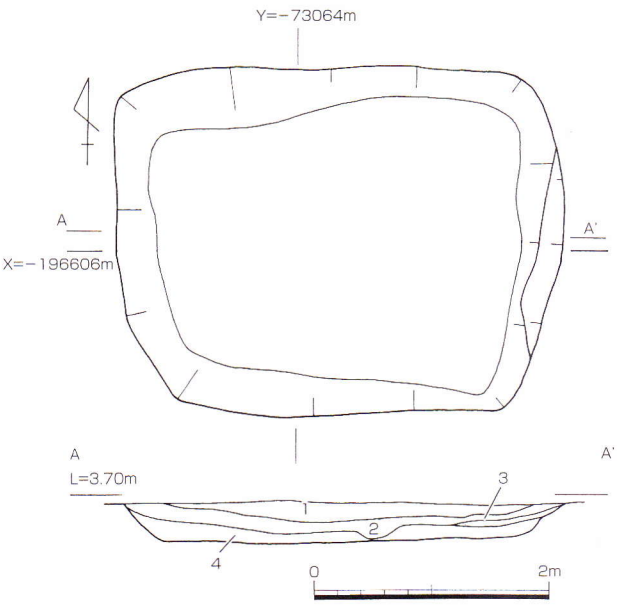
秋月遺跡第９次調査は、和歌山市秋月346番地所在の和歌山市立日進中学校新校舎建設に伴い、対象面積約800㎡を平成13年９月から約６ヶ月間の期間で実施したものである。この調査成果は、平成14年３月刊行の『秋月遺跡第９次発掘調査概報』によって報告しているが、遺物整理が進行したのでここにその追加資料として土坑24を報告する。なお、遺構位置に関しては既刊の概報に示した。

調査位置図

報告する遺構は、調査区のほぼ中央部において検出した江戸時代の土坑24である。この土坑は、東西3.9m、南北3.0mの隅円方形状のプランをもつもので、深さは検出面から35cm程度である。遺構覆土は４単位に分けられ、上位層が砂質で、下位層ほど粘質が強くなる。遺物は覆土全体に散在する状態で出土した。

出土遺物

ここに報告する遺物は、土坑24埋没時期を示す一括資料である。遺物には肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、京・信楽系陶器の他、備前焼、丹波焼、大谷焼、堺焼などの焼締陶器がある。土器類以外のものでは、瓦類、土人形、チャートを石材とした火打石、鉄製の楔や釘、漆器椀の残片などが出土した。以下、主要な遺物について個別に説明する。



1　10YR5/2(灰黄褐)シルト混細砂
2　10YR5/1(褐灰)細砂混シルト
3　10YR5/3(にぶい黄褐)粗砂
4　10YR4/3(にぶい黄褐)粗砂混粘土
土坑24遺構平面図及び土層断面図

１・２は肥前系陶器である。１は端反形の碗で、高台部が露胎のものである。釉薬は藁灰釉を用い、外面に鉄絵と化粧土を盛り上げて草花を表現している。２は直立気味に立ち上がる京焼風の碗で、高台内部を露胎とするものである。施釉部には全体に

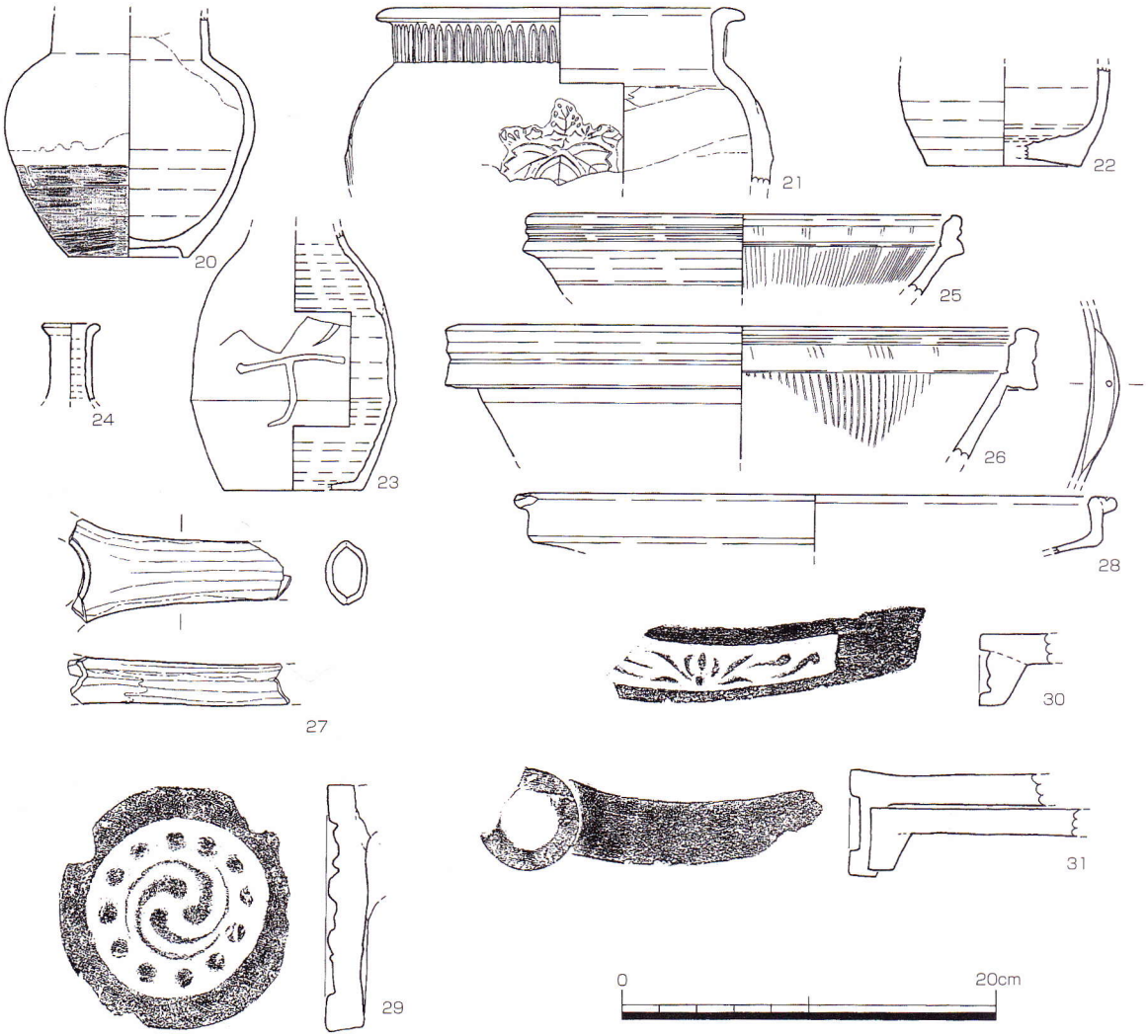
細かな貫入が多数入る。３～14は肥前系磁器である。３・４は染付碗の蓋である。３はなだらかな天井部を形成するもので、全体的に焼歪みがある。外面の染付文様は、稲束文を３ヶ所描いている。４は丸みを帯びた形状のものである。外面の染付文様は、松の絵柄を使用し、内面には四方襷文と圏線内の中央に葉文を描いている。この個体と同タイプのものが他に１点ある。５・６は染付広東碗である。ともに高台部は径5.8cm前後と大きく垂直に立ち上がる。外面の染付文様は、５には仙芝文が６には縞文が描かれている。見込み文様は、５には「寿」の文字を、６には山水画とみられる文様を用いている。高台端部は、ともに釉薬を削り取っているものであるが、６には砂の付着がみられる。７・８は染付丸碗である。７は比較的深い形状のもので、外面には石畳地文を丁寧に描いている。８は浅い形状のもので、内外面に円圏を施しただけの簡素な文様構成である。９は染付そば猪口である。外面の染付文様は矢羽根文を使用し、削り出しによる高台内部はいわゆる蛇ノ目釉剥ぎが行われている。10は口径20.8cmの青磁染付皿である。口縁部は強いヨコナデによって大きく外反させている。残存部は全体に灰緑色に発色する青磁釉が掛けられ、内底面に花弁とみられる染付が施されている。11は色絵の蓋付鉢と考えられる。下絵に染付で圏線を３条描き、上絵に

遺物実測図１

赤・紫・金絵具を用いて区画線などの文様を描いている。12は口縁部を稜花に仕上げた染付鉢である。下半部が欠失しているもので全形は不明であるが、杯洗の可能性も考えられる。染付文様は、外面には雲文を、内面には雲龍文を用いている。13・14は白磁紅皿である。ともに口径4.4cm、器高1.4cm前後と同じ法量であるものの、高台径は13が1.3cm、14が2.0cmと異なる。外面は、型押し成形による貝殻及び菊花状の文様が施され、外面体部中位から内面にかけて透明釉が施されている。

15は瀬戸本業焼の広東碗である。外面上位には五弁花を正面に２ヶ所、背面に１ヶ所の３ヶ所にスタンプし、内面には２条の圏線と五弁花を筆描きしている。施釉は全面に行い、高台部の釉薬を削り取った後、焼成を行い畳付部を砥石等によって平滑に仕上げている。16～18は瀬戸の磁器である。16は端反形の染付碗蓋である。外面の染付文様は、２羽の鶴と草花文を描き、つまみ内には圏線内に文字を描いている。また内面には下方に墨弾き技法による四方襷文を、中央部には圏線内に花卉文を配している。17・18は染付端反碗である。外面の染付文様は、17には草花文を、18には放射文を使用し、内面には圏線を、見込み部には草花文や花卉文を描いている。

19は京・信楽系陶器の灯明受け皿である。外面体部約２/３以下には回転ヘラケズリを行い、内面の受け部にはヘラ切りによる抉りを１ヶ所設けている。施釉は外面体部上位から内面にかけて褐灰色に発色する灰色釉が掛けられ、受け部の先端部分の釉薬を削り取っている。



遺物実測図２

20は肥前系陶器の壺である。体部下半から高台部にかけてヘラケズリが行われ、高台を削り出している。この土器の施釉方法は、外面の体部下半から高台内部にかけて鉄釉をハケ塗りした後、体部中位まで長石釉を掛ける。そして乾燥させた後、上位に緑釉を掛けて、高台畳付部の釉薬を掻き取っている。内面は鉄釉の泥漿を流し掛けした後、頸部付近まで長石釉を掛けている。

21は瀬戸・美濃系陶器の火鉢である。直立する頸部にはヘラ切りによる装飾が施され、体部には桐文を貼付けて浮文としている。この土器の施釉方法は、まず内面に鉄釉の泥漿をハケ塗りした後、内面上位から外面にかけて銅緑釉を掛けている。施釉部には細かな貫入が多数みられ、内面体部中位には灰を入れたとみられるラインが確認できる。

22～26は焼締陶器である。22は備前焼の壺である。底面には糸切り痕と焼成時の窯道具の痕跡が確認できる。外面には泥漿が塗られている。23は丹波焼徳利である。この個体は、3点の破片を図上復元したもので、体部上位の観察から分割成形とみられる。外面全体と内面の中位にかけて褐釉が掛けられ、また外面体部には白イッチンによる「□ノ丁」の文字が描かれている。24は大谷焼徳利口縁部の破片である。頸部から直立し、口縁部を外側に肥厚させているもので、残存部全体に褐釉が掛けられている。25・26は堺焼擂鉢である。25は口径22.6cmと小形のもので、クシ目は9条/2cmである。26は口径30.6cmと大形のもので、クシ目は10条/3.6cmと比較的粗い。ともに外面にはヘラケズリが施され、口縁部から内面にかけてはヨコナデによって調整されている。

27・28は土師器である。27は上下を分割成形し、ヨコナデによって接合した把手とみられる。上・下部ともヘラケズリを行った後、ヨコナデによって仕上げているもので、上面には透明釉が掛けられ、また下面の一部には使用時に付着した煤が付着している。本体との接合面はヘラ切りによって仕上げている。用途的には土鍋状の把手と考えられるが、本体との接合面が開口する特殊な構造のものである。28は焙烙である。外面型押し成形されたもので、外底面には雲母が混ざる離れ砂が確認できる。口縁部外面には把手が貼付され、上面から深さ2㎜の円孔が穿たれている。

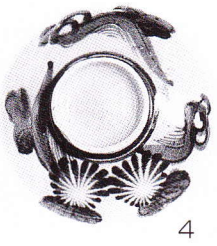
29～31は瓦である。29は三巴文軒丸瓦である。巴の巻きは左巻きで、珠文は12個を数える。瓦当面には僅かにキラコが付着し、笵傷が顕著に観察できる。また周縁部と上部の丸瓦部にはヘラミガキが施され、丸瓦部との接合面にはクシ目による接合強化を行っている。30・31は軒桟瓦である。30は平瓦部の瓦当文様に唐草文を使用し、瓦当面にはキラコが付着している。調整はヨコナデである。31は丸瓦部に蛇ノ目文を使用したいわゆる素文の瓦で、全体にキラコが付着している。この瓦の調整は、瓦当周辺部にヘラミガキを施している他はヨコナデである。

まとめ

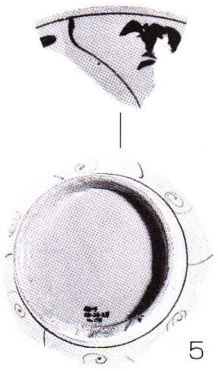
以上の土坑24出土遺物からみて、肥前系磁器の様相から第Ⅴ期に分類できるものが大半を占める。また瀬戸陶器広東碗や瀬戸の磁器染付が含まれている点からみて、その時期は19世紀第2四半期頃に位置づけられる。当遺跡では、周辺の調査成果からみても18世紀後半から19世紀中頃にかけての遺構が比較的多くを占める状況が明らかとなっている。また本遺構の特徴的な要素として、徳利では大谷焼と丹波焼が共存することなどが挙げられる。（井馬好英）

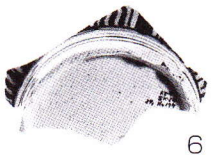
【参考文献】『秋月遺跡第9次発掘調査概報』　財団法人和歌山市文化体育振興事業団　2002年

肥前系陶器 1 碗

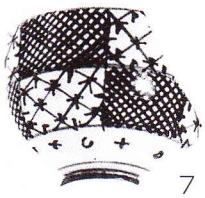


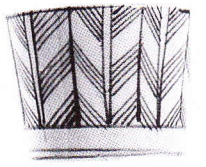
肥前系磁器染付 4 蓋、瀬戸磁器染付 16 蓋





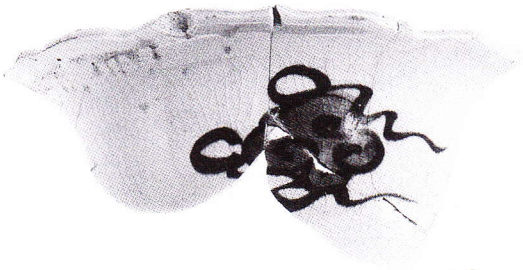
肥前系磁器染付 5・6 碗





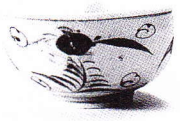
肥前系磁器染付 7 碗、9 そば猪口

肥前系磁器色絵 11 蓋付鉢、同白磁 13・14 紅皿



肥前系磁器染付 12 鉢（杯洗？）

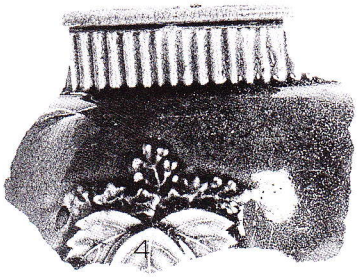
瀬戸陶器染付 15 碗



瀬戸磁器染付 17・18 碗

20

肥前系陶器 20 壺



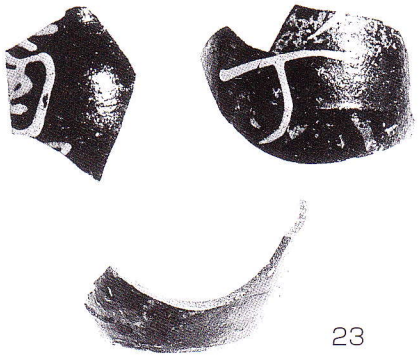
21

瀬戸・美濃系陶器 21 火鉢

22

24

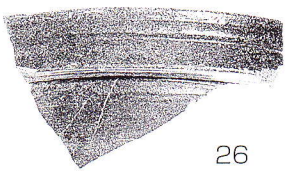
備前焼 22 壺・大谷焼 24 徳利



23

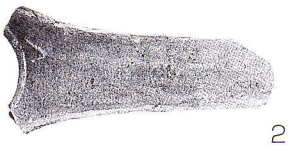
丹波焼 23 徳利

25



26

堺焼 25・26 擂鉢



27

28

土師器 27 把手、28 焙烙

29

瓦 29 軒丸瓦

30

31

瓦 30・31 軒桟瓦

Ⅳ．普及啓発活動

１．書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第37集　『田屋遺跡発掘調査概報』　（平成17年３月）

第38集　『太田・黒田遺跡 第55次発掘調査概報』　（平成17年３月）

第39集　『井辺遺跡 第６次発掘調査概報』　（平成17年３月）

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』－平成15年度－（平成17年3月）和歌山市教育委員会発行

２．報告会等の開催

埋蔵文化財発掘調査パネル展「写真で見る和歌山市の遺跡」をコミュニティセンター５館で行った。

期　間	場　所
2004.08.24～08.29	東部コミュニティセンター
2004.08.31～09.05	河南コミュニティセンター
2004.09.07～09.12	中央コミュニティセンター
2004.09.14～09.20	河北コミュニティセンター
2004.09.22～09.26	河西コミュニティセンター

平成19年３月９日
和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報
－平成16年年度（2004年度）－

編集・発行 財団法人 和歌山市都市整備公社
和歌山市西汀丁36番地
印　　刷 株式会社 和歌山印刷所

©財団法人 和歌山市都市整備公社